
バカとテストとミミック

ぎゃりこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストとミミック

【Nコード】

N5043M

【作者名】

ぎゃりこ

【あらすじ】

本が大好きな大学生、鑢やすり十種とくさがバカテスの世界へ行くお話です。

プロローグ―僕とぼくと物語（前書き）

処女作です。やさしい目で見てください。

プロローグ 僕とぼくと物語

皆さん、こんにちは。

僕の名前は、鑢^{やすり} 十種^{とくさ}本が大好きな大学生です。

皆さんは神様と聞いてどんなものを思い浮かべますか？ゼウスやポセイドンなどのギリシャ神話の神？オーディンやロキなどの北欧神話の神？まあ、多くの人はこのあたりを思い浮かべるでしょう。僕も数分前まではそうでした…。

数分前

「さて、そろそろ行くか。」

僕が大学へ行こうとすると…。

ガチャ（玄関のドアを開ける音）

パカッ（足元に黒い穴が開く音）

バツ（何かを掴もうと手を伸ばした音）

パシッ（何者かに手をはたかれた音）

キッ（はたいた相手を睨む音）

ニコッ

「アイ アム ゴッド。ぼくの家へ招待しよう。」

小学生ぐらいの男の子がいい笑顔でそんな事を言っていた…。

・・・で、今に至る。

「えーとっ、ここはどこであなたは誰ですか？」

まわりを見渡すと本で埋め尽くされた部屋とこちらを見ている一人

の少年。

「ここはぼくの家で、ぼくは神、名前はもうない。」
「もうない？」

「あなたが神だとしてどうして名前がないんですか？」

「昔ある村で本の神として崇められたけど、村もなくなり信仰する人が一人もいなくなってしまうてね。そのせいで名前も失ってしまったよ。」

「そういうものなのか？」

「じゃあ、なんで俺を呼んだんだ？」

「君のおかげでぼくは今存在してられるからね。そのお礼をした
いと思っただよ。」

「僕のおかげ？」

「どういう意味だ？」

「君みたいに本を愛している人がいるおかげで、本の神だったぼく
は今存在してられるんだよ。」

「そんな奴、僕以外にもたくさんいるだろ？」

「よくわからないけど、波長が合ったぐらいに思えばいいよ。」

「ふーん、それでお礼って具体的には何だ？」

「君の好きな物語の世界に連れてってあげるよ。」

「そんなことできるのか？」

「元とは言え神様だよ、そんなのらくしゅう、らくしゅう。」

「それじゃあ、お願いしようかな？」

「まかせたまえ、それじゃあ元となる物語を教えてよ。」

「じゃあ、バカとテストと召喚獣で。」

「あいつらと過ごす日常は楽しそうだしな。」

「うんうんバカテストは面白いよね。なんか欲しい力とかある？」

「何でもいいのか？」

「本に書かれているものならね。」

「じゃあ、刀語の忍法・骨肉細工と足軽、それと虚刀流を使えるよ
うにしてくれ。」

「了解、それじゃあ、いつてらっしや〜い。」
その言葉とともにだんだん意識が遠くなってきた。
「できるなら向こうでも本を愛してね…。」
愚問だな。僕が本を愛さないわけないじゃないか。
「ふふっ、それもそうだね…。」
じゃあ、またいつの日か…。

プロローグ 僕とぼくと物語（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

主人公紹介（前書き）

主人公の紹介です。

主人公紹介

名前：鑢やすり十種とくさ

歳：20

血液型：A型

身長：180くらい（通常時）

体重：70くらい（通常時）

容姿：普段は刀語の鑢 七花 本当の姿は空の境界の黒桐 幹也（
そのため一人称が僕）

性格：物静かな性格だが、明久たちと一緒にの時はよく騒いでいる。

趣味：読書（一度読んだものはほぼ忘れない）、鍛練（主に虚刀流
や足軽）、物真似（骨肉細工を使っているためほとんどの人は見分
けがつかない）、料理（プロ並みの腕前）

能力：虚刀流 刀語の鑢 七花が使用していた無刀の剣法

忍法・骨肉細工 刀語の真庭 蝙蝠が使用した忍法。見た目
だけではなく、体の中身までまねできる。体の柔軟さのおかげか胃
袋？の中にいろんなものを入れることができる。（蝙蝠は自分の胴
体より長い刀や無数の手裏剣、変装のための服などを入れていた。
四次元ポケットのようなもの。）

忍法・足軽 刀語の真庭 蝶々が使用した忍法。重さを無効
化できる歩法。水や舞い散る木の葉も足場にできる。

召喚獣：黒桐 幹也が黒いフード付きのローブを着ている姿。武器はなし。

腕輪：「十三人の剣士」サーティーン・ソードマンズ 刀語の変体刀十二本の使い手たちと鑢七花に姿を変えることができる。（武器あり）

明久たちが一年の時に文月学園に転校して来たことになっている。明久の家の近くに家があり、たまに弁当を作ってあげている。生活費は、本の神から月100万ほどもらっている。骨肉細工や足軽、虚刀流などを使って明久たちと問題を起こしたため、「文月のミミック（物真似師）」「無重の男」「無刀の剣士」などと呼ばれている。学力はAクラス以上だが振り分け試験当日、一日中本を読んでいたためFクラスとなった。

主人公紹介（後書き）

少し編集しました。

ご意見・ご感想お待ちしております。

僕と友とFクラス（前書き）

今回からバカテストを書いていききたいと思います。

僕と友とFクラス

問 以下の英文を訳しなさい。

「This is the bookshelf that my grandmother had used regularly」

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。」

吉井明久の答え

「 * x

教師のコメント

できれば地球上の言語で。

鑓十種の答え

「これは僕が愛していた本たちです。」

教師のコメント

君がどれだけ本を愛しているかがわかりました。できれば祖母と用と棚を抜かさないで欲しかったです。

この世界に来てから二度目の春が訪れた。

「さて、そろそろ行くか。」

鞆と弁当と本を持ってトグサはドアを開けた。

「行つてきます。」

「鑓、今日も早いな。」

宮沢賢治の詩集を読んでいると鉄人に呼び止められた。

「西村先生。おはようございます。」

詩集を閉じて挨拶をする。

「まったく、吉井にも見習わせたいな。」

「来世ぐらいに期待しましょう。」

「それもそうだな、ほら、受け取れ。」

先生が封筒を差し出してくる。

「ありがとうございますって言っても結果はわかっているんですけどね。」

「試験を受けていればAクラスの代表にもなれただろうに。」

Aクラスに興味ないし

「ぼくは本を読めればそれでいいんですよ。それに…。」

「何だ？」

「あいつらもFクラスなんでしょう？」

あいつらがいないとつまらない

「はあ、問題は起こさないでくれよ？」

「善処します（笑）」

「予想以上に酷いな。」

教室というより廃墟に近い

「まっ、本が読めるからいいか。」

[illegible]

「あの、遅れて、すいま、せん……。」

「丁度よかったです。自己紹介をお願いします。」

「おい秀吉、僕の自己紹介どうした。」

「それなら、わしが代わりにしておいたぞ。」

「そっか、ありがとな。」

「何だ秀吉。僕と一緒にのクラスじゃなかったか？」

「それもそうだな。僕がここにいるのは試験の日にか家でずっと本を

「相変わらずじゃのう。」

「それに……。」

「お前がいないとつまらないしな。」

「うれしいことを言ってくれるのう。」

「FクラスはAクラスに「試験召喚戦争」を仕掛ける!!」
雄二のその言葉を聞いて自然と顔が綻んだ。

『勝てるわけがない。』

『これ以上設備を落とされるなんていやだ。』

『姫路さんがいたら何もいらない。』

Fクラスのいたるところからそんな言葉が上がる。

試験召喚戦争とは科学とオカルトからできた試験召喚システムによりテストの点数に応じた強さを持つ召喚獣を喚び出してクラス単位で戦うもの。普通ならAクラス（最高クラス）にFクラス（最低クラス）が勝てるわけがない。

「そんなことはない。俺が勝たせて見せる。」

『何をばかなことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

「根拠ならあるさ。それを今から説明してやる。」

聞かせてもらおうじゃないか

「おい、康太。姫路のスカート覗いてないで前に来い。」

「……!!（ブンブン）」

「は、はわっ」

康太も相変わらずだな

「土屋康太。こいつがあ有名な、寡黙なる性職者だ」
ムツリーニ

「……!!（ブンブン）」

ムツリーニ。その名は男子せいには畏怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑を以て挙げられる。

僕の親友の一人だ

『ムツリーニだと……?』

『馬鹿な、ヤツがそうだというのか……？』

「？？？」

姫路は意味がわかってないようだ

「姫路のことは説明する必要はないだろう。」

「えっ？わ、私ですかっ？」

上位一桁に常に名前を残しているしな

「ああ。うちの主戦力だ。期待している。」

『そうだ俺たちには彼女がいるんだ』

『ああ。彼女さえいれば何もいらぬ』

姫路にラブコールを送っている奴は誰だろう？

「木下秀吉だっている。」

演劇部のホープだということと双子の姉のことでそれなりに有名だ

『おお……！』

『確か、木下優子の……』

「当然俺も全力を尽くす。」

坂本雄二。こいつも僕の親友だ

『確かになんかやってくれそうだな』

『坂本って、小学生の頃、神童と呼ばれていなかったか？』

『Aクラスレベルが二人もいるってことか』

「それに吉井明久もいる。」

……シン……

上がっていたはずのクラスの士気が一気に下がった

吉井明久。観察処分者の肩書きを持つ僕の親友だ

観察処分者 教師の雑用係として特例としてモノに触れる召喚獣で力仕事をこなす。しかし召喚獣の負担の何割かは召喚者にフィードバックされる。

「まあ、いてもいなくても同じだ。」

「雄二、そこは僕をフオローすべきところだよな？」

「それに俺たちには最強の戦士がいる。」

「大胆に無視されたっ！」

「トゲサ、前に出てこい。」

「了解」

「こいつの二つ名は、文月のミミック（物真似師）、無重の男、無刀の剣士だ」

「文月のミミック、実在していたのかっ？」

「無重の男、壁を駆け上がり鉄人から逃げ切ったという噂は本当だったのかっ？」

「無刀の剣士…鉄人と戦い引き分けたという男、そうかヤツが…」

「しかもミミックってAクラス以上の学力の持ち主だよな？」

「そういうこと僕の力は、そのうち見してあげるよ。」

「こいつはうちのクラスの最終兵器だ。」

「これなら勝てるっ！」

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

「『当然だ！』『』『』」

「ならば全員ペンを執れ！出陣の準備だ！」

「『『『おおー！！！！』『』『』」

こうして僕たちの戦いは始まった

僕と友とFクラス（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

僕と作戦会議とDクラス（前書き）

長い目で見てやってください。

僕と作戦会議とDクラス

問 『人が生きていく上で必要となる五大栄養素を全て書きなさい』

姫路瑞希の答え

「？脂質？炭水化物？タンパク質？ビタミン？ミネラル」

教師のコメント

さすがは姫路さん。優秀ですね。

吉井明久の答え

「？砂糖？塩？水道水？雨水？湧き水」

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

鑓十種の答え

「？本？鍛練？物真似？料理？友人」

教師のコメント

それは君が生きていく上で必要なものです。

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」

「下位クラスの使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」

やれやれ、僕が背中を押してやるか。崖の上から。

「明久。」

「何トグサ？」

「一仕事後の飯は一段とうまいと思うんだ。」

「トグサ！お弁当作ってきてくれたの？」

「ああ。この弁も「行ってきますっ！」

嬉々としてDクラスに向かっていった。

「じゃあ、雄二先に屋上に言ってるよ。」

「ああ。わかった。」

「明久がどんな目に遭ったか後で教えてくれ。」ニヤツ

「了解」ニヤツ

数分後屋上にて…

明久たちが屋上にやってきた。みんなが目を細める中ムツツリーニだけが姫路のスカートを注視していた

「明久、お疲れ。」

「やいトグサ。よくも騙してくれたなっ！」

明久が訳の分からないことを言ってくる

「ぼくはただ弁当を作ってきたことと、どんな時に食べる飯がうまいのかを言っただけだ何もウソは言ってるない」

「それを言われると何も言えない…。」

「明久。宣戦布告はしてきたな？」

雄二がフェンスの前の段差に腰掛けながら言う。

「一応今日の午後に関戦予定と告げてきたけど。」

明久たちもそれぞれ腰を落とす

「それじゃあ、先にお昼ご飯ってことね？」

美波が言う。島田美波 スレンダーという言葉がぴったりと当てはまる女の子。僕の去年のクラスメイトだ

「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともなものを食べるよ？」

「大丈夫、今日は久しぶりのトグサのお弁当があるから。」

あてにされても困るんだが

「吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

姫路が吉井に訊ねている

「いや。一応食べてるよ」

「水と塩と砂糖は表現としては舐めるだぞ。」

前々から言いたかったことを言う

「飯代まで遊びに使うお前が悪いよな。」

雄二が言う

「仕送りが少ないんだよ!」

「平均的な高校生が生活するには十分すぎるくらいだけだな。」

「トグサが毎日お弁当を作ってきてくれればいいのに。」

「お前が毎月の食費を出せばいつでも作ってきてやるよ。」

まあ、無理だろうけどな

「……あの良かったら私が作ってきましようか?」

「え?」

明久。言葉がおかしいぞ

「本当にいいの? 僕、塩と砂糖とトグサのお弁当以外のもの食べるのなんて久しぶりだよ!」

よく生きてるなこいつ

「はい。明日のお昼でよければ」

「……ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井だけに作ってくるなんて。」

美波が棘のある言葉言う

「あ、言え! その皆さんにも……。」

「俺達にも? いいのか?」

「はい。嫌じゃなかったら。」

「それは楽しみじゃのう。」

「……………。(コクコク)」

「……お手並み拝見ね。」

本人も含めると七人分か。大変そうだな

「それなら僕も作ってこよう。ひとりで七人分は大変だしな。」

「あつ、はい。ありがとうございます。」

「姫路さんて優しいね。」

「そ、そんな……。」

「実は僕、初めて会う前から君のこと好き初めて会う前から?」

「おい明久。今振られると弁当の話はなくなるぞにしたいと思つてました。」

変態現る

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ。」

「明久。お前はたまに俺の想像を超えた人間になる時があるな。」

「だって……お弁当が……。」

「さて、話がかなり逸れたな。試召戦争に戻ろう。」

「あのひとつ聞きたいことがあるんですけど。」

姫路がこちらをちらちら見ながら手を挙げる。

「何だ？姫路。」

「鑢君は本当にミミックなんですか？」

何だそんなことが

「ああ、こいつは正真正銘ミミックだ。トグサ見せてやれ。」

やれやれ

「何かリクエストはあるか？」

「…姫路。ネコミミ付きで。」

「了」解

そう言いながらドアの陰に隠れる

「なんで隠れるんですか？」

姫路が聞いてくる

「ちよつとグロいからな。」

ぐにゅぐにゅぐにゅぐにゅ

顔を粘土のようにこねる

「顔はこれでよし。」

ごきゅごきゅごきゅごきゅ

骨と筋肉を作りかえる

「大丈夫なんですか？」

「大丈夫。いつものことだ。」

姫路と雄二が話している

ごきゅごきゅごきゅ

「後は…。」

グイッと腕を口の中に入れ鞆を出す

「制服はこれでいいとして…。」

しまった。ネコミミがない

「康太。ウサミミでもいいか？」

「…かまわない。」

ドアの陰から出る

「これがミミック（物真似師）と呼ばれる所以です。私。」

パシャッパシャッパシャッ

ムツツリーニがローアングルから私のことを撮る

「いつ見てもそっくりだね。」

「演劇部に欲しいのう。」

「本当に痛くないの？」

「さすがだな。」

「鏡を見てみたいですよ。」

それぞれが感想を述べる

「また話がずれてしまいましたね。私は着替えてきますから、坂本君たちは話を続けていてください。」

「ああ、分かった。」

さて着替えるか

ぐにゅぐにゅぐにゅぐにゅぐにゅぐにゅ

ごきゅごきゅごきゅごきゅごきゅごきゅごきゅごきゅごきゅ

「いいか、お前ら。うちのクラスは最強だ。」

「いいわね。面白そうじゃない！」

「そうじゃな。Aクラスを引きずり落としてやるかの。」

「……。（グッ）」

「が、頑張りますっ」

「もとよりこの身は一本の刀。好きに使え雄二。」

「好きに使わせてもらうさ。それじゃ、作戦を説明するぞ。」

風がそよぐ屋上で、僕は勝利の為の作戦に耳を傾けた。

僕と作戦会議とDクラス（後書き）

ご意見・ご感想をお待ちしております。

僕と戦争と二人の鉄人（前書き）

優しい目で見てやってください。

僕と戦争と二人の鉄人

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。
『光は波であって、（ ）である』

姫路瑞希の答え

「粒子」

教師のコメント
よくできました。

土屋康太の答え

「寄せては返すの」

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

「勇者の武器」

鑓十種の答え

「主人公たちに新たな力を与える都合のいいもの」
教師のコメント

先生もRPGは好きです。

『さあ来い！この負け犬が！』
ペラッ

「なあ雄二。」

本を読みながら隣にいる雄二に話しかける。

「どうした？トグサ。」
ペラッ

「なんで僕は参加できないんだ？」

テストは全部終わらしてきた

「お前は最終兵器なんだ。Aクラスまでは使うつもりはない。」

「じゃあ、遊んできていいか？」

「おい、問題は起こすなよ。明久みたいに観察処分者になるぞ。」

そんな心配は必要ない

「雄二。僕は観察処分者には絶対にならない。」

「どうしてだ？」

「学園のために働いているからさ。」

「学園のため？」

雄二がよくわからないといった顔でこちらを見る

「こんなうわさを聞いたことがあるだろう？鉄人は戦争時二人になる。」

「まさかお前が？」

「というわけで遊んでくるね。」

明久たちは、頑張っているかな？

「島田さん、君のことは忘れない！」

明久が美波を見捨てようとしていた

「やれやれ、あいつはしょうがないな。」

どうしてくれよう

「このまま無事に卒業できるなんて思わないでくださいね！」

見ると清水美春が鉄人に補習室へ連行されるところだった

明久に釘を刺しておくか

「……うちを見捨てたわね？」

「……記憶にございません。」

「吉井。あと少しで敵前逃亡で補習室に行くところだったぞ？」

「て、鉄人！どうしてここに？」

「西村先生。丁度よかった。今からこいつを倒すんで補習室に連れて行ってください。」

それは困る。いくら弱いといっても大事な戦力だ

「島田。清水のことでちよつと話がある。一緒にFクラスに来てくれないか？」

これなら言うことを聞くだろう

「美春の…。わかりました。吉井、覚えておきなさいよ。」

「吉井、戦死したら清水の隣で補習を受けさせてやるからな。」

これだけ言うておけば死ぬ気でやるだろう

「行こう須川君。戦争はまだまだこれからだ！」

「どうした島田…と西村先生？」

「ちよつとね…。」

雄二の質問に対して美波が答える

「まず美波に謝らないとな。悪かった、清水の話は嘘だ。」

「………どういふことですか。」

美波から般若のような顔でこっちを見る

「あいつはあれでも大事な戦力だ。ここで失うわけにはいかない。」

「なんで西村先生がFクラスのことを？」

ああ、まだ鉄人のままだったな

「ちよつと待つてろ。」

そう言うて掃除ロッカーに入る

ぐにゅぐにゅにゅにゅ

ごきゅごきゅごきゅ

元の姿に戻つて外に出る

「そういうことね。」

美波があきれた目でこっちを見る

「悪いかつたな。明久のことは僕に任せてくれ。」

「わかつたわ。」

「で、具体的にどうするんだ。」

雄二が会話に入ってくる

「そうだな…。」

「代表！吉井隊長が先生たちに偽情報を流してくれと。」
丁度よかった

「僕が流しておくから須川は前線に戻ってくれ。」

「了解した。」

「何を流すつもりなんだ？」

雄二が聞いてくる

「明久に頑張ってもらうのさ。」

「吉井に？」

「聞いてればわかるよ。」

ピンポンパンポーン

連絡いたします。

船越先生、船越先生。

船越先生。婚期を逃して、生徒にまで交際を迫るようになった先生だ

吉井明久君が体育館裏で待ってます。

明久頑張れよ

生徒と教師の垣根を超えた、男と女の大事な話があるそうです。

ピンポンパンポーン

さてと

『トグサああああああっ！！』

戦争が終わるまでここにいるか

「うおおおおっ！！」

終わったみたいだな

他のクラスにばれないように教室に戻っているか

ガヤガヤ

しばらくするとみんなが教室に戻ってきた

ガラッ

「みんなおかえ」「シャああああアッああアッ！！」

明久が包丁を持ってこつちに来た

「虚刀流『牡丹』」

振り向きざまの腰の回転を乗せて明久の鳩尾に後方回し蹴りを放つ
「ぐぼおっ！」

二度と襲つてこないように脅しとくか

「だれか千枚通し持つてないか？」

「すいません。僕が悪かったです。」

これで襲つてこないか

「皆！今日はご苦労だった！明日に備えて今日はゆっくり休んでくれ！解散！」

さてと帰るか

「雄二、帰ろうか。」

「おう。」

「明久。回復したらうちに来い。勝利祝いに飯作つてやる」

「……………」

「返事がない。ただの屍のようだ。」

「生きてるよ……。」

じゃあ先に帰るかな

帰り道

「あ！本学校に忘れてきた。」

「さつさと取つてこい。」

「じゃあ、また明日な。」

「おう。」

「姫路、まだ残つてたのか？」

「あつ、は、はいっ。」

卓袱台の上の便せんをあわてて隠しながら答える

「明久は？」

「吉井君なら先ほど帰られましたよ。」

入れ違いになつたかな？

「鑓君は何でここに？」

「ちよつと本を忘れてね。」

卓袱台の下にある本を取り出しながら言う

「じゃあ、また明日。」

「はい、明日も頑張りましょう。」

「卵買えてよかった。」

買い物をしていたら遅くなつてしまった

く~~~~~

シクシクシクシク

家の前では明久が膝を抱えて泣いていた

僕と戦争と二人の鉄人（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

僕と弁当と学園長の依頼（前書き）

優しい目で見てやってください。

僕と弁当と学園長の依頼

問 料理のさしすせそと呼ばれる調味料を書きなさい

吉井明久・鑓十種の答え

「さとう・しお・おす・しょうゆ・みそ」

「砂糖・塩・酢・醤油・味噌」

教師のコメント

正解ですが吉井君は塩と砂糖ぐらい漢字で書いてください

姫路瑞希の答え

「酢酸・硝酸・水銀・セリン・ソルビン酸」

教師のコメント

これらは世間一般では調味料とは言いません

目の前には

K・O寸前のように足が震えているムッツリーニ

瀕死寸前の雄二

捨てられた子犬のように僕を見る明久と秀吉

半分ほど残っている姫路の弁当

2・Fの鑓十種君。支給学園長室に行ってください。繰り返します…

どうしてこうなった…。

数分前

「うあー…づがれだー。」

明久が机に突っ伏している

四教科のテスト＋船越先生だからな

「うむ。疲れたのう。」

「……。（コクコク）」

明久の言葉に秀吉たちが答える

「昼飯食いに行くぞ！今日うはラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな。」

「吉井たち食堂行くの？ウチも一緒にいい？」

明久たちが食堂に行こうとしている。弁当のこと忘れてんのか？

「おい、お前ら弁当のこと忘れてないか？」

弁当を出しながら明久たちに言う

「そうだった。今日は姫路さんとトグサの弁当があるんだった。」

「ではこんな教室より屋上のほうに行くかのう。」

「そうだね。」

「お前たちは先に言っててくれ。飲み物でも買ってくる。」

「それならウチも行く。」

「僕も行こう。」

「トグサの弁当はどうするんだ？」

「持って行くよ。明久に渡したら僕らの分がなくなりそうだしな。」

「じゃあ、僕たちは先に言ってるよ。」

屋上

「へー、こりゃ旨そうだな。どれどれ？」

「あつ、雄二。」

僕たちと一緒にジュースを買ってきた雄二が卵焼きを口に放り込んだら

パク バタンガシャガシャン、ガタガタガタ

ジューズの缶をぶちまけて倒れた

「さ、坂本！？ちよつと、どうしたの！？」

遅れてきた美波が雄二に駆け寄る

僕と明久と雄二で目で会話する

『どうした雄二？』

『明久。毒を盛ったな。』

『毒じゃないよ、姫路さんの実力だよ』

「足が……攣つてな……。」

雄二が姫路を傷つけないようにウソをつきながら立った

「そうなの？」

美波が不思議そうな顔をしている

「ところで島田さん。その手をついてるあたりにさっきまで虫の死骸があつたから手を洗ってきたほうがいいよ。」

「ホントに？ちよつと行ってくる。」

明久が美波を退場させる

「島田はなかなか食事にありつけずにおるのう。」

「全くだね。」

「僕のお弁当は美波が来てから開けようか。」

（明久、今度はお前がいけ！）

（む、無理だよ！僕だったら死んじやうよ！）

（雄二がいきなよ！姫路さんは雄二に食べてもらいたいはずだよ！）

（姫路は明久に食べてもらいたそうじゃが）

（僕もそう思う）

（二人とも乙女心を分かってないね！）

（いやわかってないのはお前のことだと…）

（往生際が悪い！）

「あつ！姫路さん、あれはなんだ！？」

「えっ？なんですか？」

明久が指さす方向を姫路が見る

（おらあっ！）

（もごああっ！？）

明久が雄二に無理矢理弁当を食わせている

「…お主、存外鬼畜じゃな。」

「同感。」

「くそっ！半分残った！」

明久がそう言いながら僕を見る

「明久！なぜ僕を見る！？」

「明久！これ以上罪を重ねてはならぬ！」

秀吉、ありがとう

ピンポンパンポーン

2 - Fの鑢十種君。支給学園長室に行ってください。繰り返しま

す…

「……………」

秀吉。捨てられた犬のように僕を見ないでくれ

すっ。くいつ。

「……………」

立ち上がると秀吉が袖を引っ張ってくる

しょうがない

「僕が君たちを守ろう。」

明久から弁当を奪い取り一気にかきこむ

「姫路うまかったよ。ちょっと、学園長の所に行ってくる。」

明久視点

「姫路うまかったよ。ちょっと、学園長の所に行ってくる。」

「そうですかー。わかりました。」

その言葉を交わすとトグサは階段を下り…

バタバタバツゴンツドンガラガツシャーン

「ちよつと、トグサ？大丈夫？」

「俺は雄二の仇を討ちに來たんじゃない…死にに來たんだ。」

「ちよつと、何言つてんの！？死んじゃだめよ！」

「ごめんな、美波…俺はもう、あんたの命令を、守れそうにないや。」

「何言つてんの？キャラ變つてるわよ？あつ、西村先生！トグサを止めてください！」

「鑢？お前どうしたんだ？」

「あんたにやちつとも、ときめかねえ。」

「何を言つてる？とまれっ！」

「七花八裂（改）！！！」

「ぐはあっ！」

「ちえりおおおおおおおおおおおおおつっ！！！」

…て行つた

「………。」

僕たちは忘れない勇氣ある剣士がいたことを…

明久視点終了

「ここは？」

「保健室だ。」

横を見るとボロボロの鉄人がいた

「どうしたんですか？その傷。」

「覚えてないのか？」

「？」

「まあいい。起きたんなら学園長の所へ行け。」

「わかりました。」

学園長室

コンコン

「入りな。」

「失礼します。」

「やれやれ。やっと来たかい。」

壁にある時計を見ていると一時間ほど気絶していたことが分かった

「すいません。なぜかわかりませんが気絶してしまっていたので。」

「西村先生から話は聞いてるよ。」

「そうですか。で、話というのは？」

「ああ、これだよ。」

そう言つて引き出しから出した銀色の腕輪を投げてくる

「これは？」

「教師と同じことができる腕輪さ。」

「召喚フィールドの展開ができるということですか？」

「それと召喚獣がものに触れるんだよ。」

「フィードバックはどうなるんですか？」

腕輪をつけながら聞く

「観察処分者よりかなり楽になるよう設定してあるよ。」

「これを使って戦争時に教師の手伝いをしろってことですか？」

「その通りだよ。西村先生に化けていろいろやっているようだからね。」

「で、この腕輪の名前はないんですか？」

「そういえばまだ決めてなかったねえ。丁度いいあんたが決めな。名前ねえ」

「円刀『かなわ銀』で」

「なかなかいい名だねえ。ついでに始動キーも考えな。」

自分の名前でいいか

「ファイレfile」

「ファイレ鏢か。なんでドイツ語なんだい？」

「特に意味はありません。」

「まあいいさ今度から頼むよ。」

一枚の紙を渡しながら学園長が言う

「わかりました。失礼します。」

そう言い学園長室を出る

渡された紙には一行だけ書かれていた

『鑓十種を教員代行者に任命する。』

さて戦争の結果でも聞きに

「坂本め、よくも俺にこんなことを…！」

勝ったみたいだな

明日はAクラスか

僕と弁当と学園長の依頼（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

僕とAクラスとFクラスの實力（前書き）

（注）前話で主人公は丸一日気絶していました。
優しい目で見てください。

僕とAクラスとFクラスの実力

問 有機物を燃やすと発生する二つの物質名を答えなさい。

姫路瑞希・鏑十種の答え

「二酸化炭素・水」

「CO?・H?O」

教師のコメント

正解です。

吉井明久の答え

「情熱・勇気」

教師のコメント

先生、この答えは嫌いじゃないです。

「やばい！遅刻だ！」

雄二視点

「一騎打ち？」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎打ちを申し込む。」

「うーん、何が狙いなの？」

木下優子が質問をしてくる

狙い？そんなもの、一つしかないだろう

「もちろんFクラスの勝利だ。」

「面倒な戦争を手軽に終わらせることができるのはいいけど、わざわざリスクを犯す必要もないわね。」

「賢明な判断だな。」

予想通りの返事。だがこつちにはまだ手がある

「ところでCクラスはどうだった？」

「時間は取られたけど、それだけだったよ？」

「Bクラスとやりあう気はあるか？」

「Bクラスつて、昨日来ていたあの？」

「ああ、あの戦争は「和平交渉にて終結」つてなっているからな。規約には何の問題もない。もちろんDクラスもな。」

「それつて脅迫？」

失礼な

「ただのお願いだよ。」

「うーん……わかったわよ。代表が負けるなんてありえないもんね。」

「え？本当？」

明久が驚いている

もつと手こずると思ったんだが

「だって、あんな奴が代表のクラスとやりたくないもん。」

あんなのでも役に立つんだな

「でも、こちらからも提案。代表同士だけじゃなくてお互い五人ずつ選んで三勝したほうが勝ち、っていうのなら受けてもいいよ。」

想定範囲内だ

「だが、三試合の科目の選択権はこつちがもらう。」

ムツツリー二や俺の作戦のためにもこれは必須だ

「え？うーん……。」

「……受けてもいい。」

翔子か

「あれ？代表。いいの？」

「……その代わり、条件がある。」

「条件？」

「……負けたほうは何でもひとつ言うことを聞く。」

まだ俺のこと諦めてないのか

「交渉成立だな。」

「ちよつと、雄二？」

「大丈夫だ。姫路に迷惑はかけない。」

「……勝負はいつ？」

「十時からでいいか？」

「……わかった。」

トグサはまだか

雄二視点終了

明久視点

「それでは一人目の方、どうぞ。」

ついに始まつちやたよ。トグサはまだ来ないし

「私が出ます。教科は物理で。」

Aクラスからは佐藤美穂さん。

Fクラスからは誰を出す雄二？

「よし。頼んだぞ、明久。」

「え！？僕！？」

大事な初戦を僕が？

「大丈夫。俺はお前を信じてる。」

雄二の奴…

「僕に本気を出させてこと？」

「お前の本気をAクラスの奴らに見せてやれ。」

『おい、吉井って実は凄いやつなのか？』

『いつものジョークだろ？』

「吉井君、でしたか？あなた、まさか……。」

いい観察眼をしているな、佐藤さん

「あれ、気付いた？」

「それじゃ、あなたは……！」

「そうさ。今まで隠してきたけど、実はぼく…

この場にいる全員に告げる

…左利きなんだ。」

『Aクラス佐藤美穂VS Fクラス吉井明久』
『物理 389点 VS 62点 』

おかしい。本気を出したのに負けるなんて。

「よし。勝負はここからだ。」

「ちよつと雄二！なんかかける言葉はないの！」

「ああ…。時間稼ぎもできないのか。この役立たず。」

本気を出した左腕で殴りたい

「では、二人目の方どうぞ。」

「…………。(スクツ)」

ムツツリー二が立ち上がる。

「じゃ、ボクが行こうかな。」

Aクラスからはボーイッシュな女の子が出てきた。誰だろう？あまり見たことがないけど

「1年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね。」

「教科は何にしますか？」

高橋先生がムツツリー二尋ねる

「…………保健体育。」

ムツツリー二の最強の教科が選択される

「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？でも、ボクだつてかなり得意なんだよ？…実技でね。」

なんだかとっても問題発言！？どうしよう！胸のドキドキが止まらない！

「吉井君だっけ？保健体育なら僕が教えてあげようか？もちろん実技で。」

「望むところ」「アキにはそんな機会無いから必要ないのよ!」「そうです!永遠に必要ありません!」……。」

「明久が死ぬほど悲しい顔をしてるんだが。」

あれ?おかしいな?目から朝食の塩水が出てくる。

「そろそろ開始してください。」

「はい。試験召喚つと」

「……………試験召喚。」

二人に似た召喚獣が出現する。

ムツツリー二は小太刀の二刀流。工藤さんは巨大な斧。見るからに強そうだ。しかも腕輪も付けてる。

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ。」

巨大な斧に雷光をまわせムツツリー二の召喚獣に振り落とす

「……………加速。」

ムツツリー二の召喚獣がぶれた?

「……え?」

相手の戸惑う顔。ムツツリー二の召喚獣はいつの間にか射程圏外にいた。

「……………加速、終了。」

ボソリと、ムツツリー二がつぶやくと相手の召喚獣が全身から血を噴き出して倒れた。

『Aクラス工藤愛子VS Fクラス土屋康太』

『保健体育 446点 VS 572点』

』

つ、強い!僕の総合科目並みの点数だ!

「そ、そんな……!この、ボクが……!」

「では、三人目の方。」

「あ、は、はいっ。私ですっ。」

「それなら僕が相手をしよう。」

相手は学年自責の久保利光。姫路さんでも勝てるかわからない

「科目はどうしますか？」

「総合科目でお願いします。」

高橋の先生の問に姫路さんが答える

「それでは……。」

『Aクラス久保利光VS Fクラス姫路瑞希』

『総合科目 4230点 VS 4409点』

『マ、マジか！？』

『いつの間にこんな実力を！？』

『二人の点数、霧島翔子に匹敵するぞ！』

至る所で驚きの声上がる

「Fクラスみんなのために勝ちます！」

「強くなったのは君だけじゃないんだよ！姫路さん！」

接戦の末、姫路さんは負けてしまった。どうするの雄二？後がないよ

「これで2対1ですね。次の方は？」

「アタシがいくよっ」

優子さんが出てきた。どうする雄二？

「秀吉、頼む。」

「さて、頑張るかろう。」

なるほど、秀吉ならお姉さんの苦手教科や集中力の乱し方を知っているはず

「ところでさ、秀吉。」

「なんじゃ？姉上。」

「Cクラスの小山さんて知ってる？」

「はて、誰じゃ？」

「じゃーいいや。その代わり、ちよつとこつちに来てくれる？」

「うん？ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上？」

何か嫌な予感がする

『姉上、勝負は…どうしてワシの腕を掴む？』

『アンタ、Cクラスで何してくれたのかしら？どうしてアタシがCクラスの人達を豚呼ばわりしていることになっているのかなあ？』

『はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して…』

あ、姉上っ！ちがっ！その関節はそっちにまがらなっ！』

「「「……………」」」

「秀吉は急用ができたから帰るって。代わりの人出してくれる？」
万事休す！どうしよう

ガラガラッ

「僕が出ようっ！」

扉を開けて入ってきたのは初めて見る生徒だった

明久視点終了

なんとか間に合った

「待たせたな、みんな。」

みんなの反応がない。どうしたんだ？

「お前誰だ？」

雄二が僕にそう言ってきたので鏡を取り出して自分を見る

鏡の中には温和な顔立ちで黒縁メガネをかけた自分がいる

そうか、この姿でみんなに会うのは初めてだったか

「鑢十種だよ、雄二。」

鏡をしまいながら雄二に言う

「こんな日まで変装してくるなよ。」

雄二があきれたという目で見てくる

「この姿が本当の姿だよ雄二。」

明久たちが目を点にしている

「そのことは、後で聞かせてもらっぞ。それより、2対1で負けて

る。必ず勝てよ。」

「任せろ」

そう言いながら木下さんの前に立つ

「ずいぶんとゆつくりした登校ね？ 鑓君？」

「いろいろあってね。」

「無刀の剣士と呼ばれてるあなたがFクラスにいたと思わなかったわ。」

「Aクラスにいても、あいつらがいないとつまらないしね。」

明久たちを指さしながら言う

「お喋りはここまでにしましょう。」

「それもそうだ。」

「教科はどうしますか？」

高橋先生が聞いてくる

「古典でお願いします。」

「わかりました。それでは…。」

「試験召喚っ！！」

『Aクラス木下優子VS Fクラス鑓十種』

『古典 396点 VS 420点』

二人の召喚獣が出てくる

僕の召喚獣はこの姿にフード付きのローブを着ている。武器らしきものは見えない

木下さんの召喚獣は西洋鎧に、ランスという装備だった

「ちよつと、鑓君？ あなたの召喚獣に武器がないのはどういうこと？」

「さあ？ 何でだろうね？」

木下さんの質問に質問で返す

「っ。速攻で終わらせるっ！」

頭にきたのかランスを構え真っ直ぐに突っ込んでくる

「そんな攻撃は当たらないよ。」

召喚獣を右に飛ばせ腕輪を発動させる

「13人の剣士。サードインソードマンズ薄刀「針」！」

僕の召喚獣が光に包まれる

「な、何？」

木下さんが驚いている

光から出てきたのは向こう側が見えるほど薄い刀を持った女と見間違うような総髪（カウボーイ）の美少年だった。

錆白兵：刀語の世界で日本最強と呼ばれた男

「行くよっ！」

木下さんがランスを構えて突撃してくる。並みの召喚獣ならひとたまりもないだろう。だが：

「拙者にときめいてもらうでござる！」

腕輪を使った僕の召喚獣に負けはない

「奥義！薄刀開眼！」

僕の召喚獣がランスごと彼女の召喚獣を両断した

「これで2対2です。」

高橋先生が言った

「最後の一人、どうぞ。」

「……はい。」

「俺の出番だな。」

お互いのクラスの代表が出てくる

「教科はどうしますか？」

「教科は日本史、内容は小学生レベルで100点満点の上限ありだ！」

「わかりました。問題を作ってくるので待っていてください。」
先生を見送り雄二に近づく

「雄二、後は任せたよ。」

「ああ。任せられた。」

明久が雄二と握手をし下がっていく

「……………。(ビツ)」

ムツリーニが歩み寄り、ピースサインを雄二に向ける。

「お前の力には随分助けられた。感謝している。」

「……………。(フツ)」

口の端を軽く持ち上げ、元の位置に戻った

「遅れたが、ちゃんと結果は残したぞ。」

「ああ。よく来てくれたな。あとは任せろ。」

そう言い明久たちの所に行く

「では、最後の勝負を行います。参加者は視聴覚室に向かってください。ほかの人はここでモニターを見ていてください。」

そう言い高橋先生たちは視聴覚室に向かった

モニターを見ていると木下さんが近づいてきた

「どっちが勝つと思う？あたしは、そっちの代表が勝つと思うんだけど？」

「どうして雄二が勝つと思うんだ？」

「こんな手の込んだことしてるんだもん。それにFクラスのあの盛りあがりよう。何かあると思うのが普通でしょ？」

「僕は霧島さんが勝つと思うよ。」

「なんでよ？」

「雄二は『学力がすべてではない。』と言っていた。そんなこと言う奴が今更小学生の問題を見直すわけがない。」

《日本史勝負100点満点》

《Aクラス霧島翔子97点》

《Fクラス坂本雄二53点》

「ほらな。」

「ほらなつて。あんた悔しくないの？」

木下さんがそんなことを聞いてくる

「あいつらがいればそれで十分だよ。木下さん。」

明久たちを見ながら言う

「3対2でAクラスの勝利です。」

視聴覚室に入ってきた僕たちに高橋先生がそう告げる

「……雄二、私の勝ち。」

「……殺せ。」

「いい覚悟だ、殺してやる！」

明久が雄二に向かっていく
やれやれ

「虚刀流『蒲公英』」

明久の服を掴み引き寄せ貫手を放つ

「ぐふうっ！ト、トグサ。どうして雄二を庇うんだ！？」

「雄二のおかげでここまで来れたんだろう？どうして責める必要がある？」

「トグサ……。」

「……ところで、約束。」

霧島さんがそう雄二に行った

約束？

「明久、約束って何だ？」

「交渉するときに勝ったほうの言うことを何でも聞くって決めたんだ。」

そついうとムツツリー二と撮影の準備をしだした

「わかつている、何でも言え。」

「……それじゃ。」

雄二を真っ直ぐ見据えて

「……雄二私と付き合つて。」

言い放つた

話を聞くと雄二のことをずっと一途に思っていたようだ

「拒否権は？」

「……ない。約束だから。今からデートに行く。」

そういうと首根っこを掴み雄二を引きずって行った

「ト、トグサ！助けてくれっ！」

雄二が助けを求めてくる。しょうがないな

「霧島さん。」

「何？」

雄二が僕を救世主を見るような眼で見てるのに対して霧島さんは親の仇を見るような眼で見てる

「丁度映画のタダ券があるから二人で見てきなよ。」

霧島さんにタダ券を渡しながらかう言う

「ありがとう。鑓はいい人。」

「謀つたな！トグサ！」

人聞きの悪い

「デートのプランを立ててないお前を助けてやっただろう?」

いい笑顔を向けて言い放つ

「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ。」

「あれ？西村先生。僕らに何の用ですか？」

「喜べお前ら。戦争で負けたおかげで担任が俺になるそうだ。1年

間死に物狂いで勉強できるぞ。」

「い
い
い
い
い
い
い
い
い
い
つ
！
？」

Fクラスの叫び声は、澄み渡る青空に吸い込まれていった……。

僕とAクラスとFクラスの実力（後書き）

ご意見・ご感想をお待ちしております。

誰か、主人公とくっつけてほしいキャラがいたら感想に書いてください。

アタシとあいつとクロエーの心（前書き）

木下優子とくつつけることにしました。

アタシとあいつとクロエーの心

問 円卓の騎士物語で知られるアーサー王が使ったとされる聖剣の名前を答えなさい。

鑢十種の答え

「Excalibur」

教師のコメント

正解です

吉井明久の答え

「エクスカリバー」

教師のコメント

驚いたことに正解です。「約束された勝利の剣」と薄く書いてあるのが気になりますが

タッタッタッタッタ…。

朝の街を軽快に走る

今の時刻は六時二十五分。明久はまだ夢の中だろう
タッタッタッタッタ…。

僕はいつもの鍛練を行うため河原に向かっている

いつもといっても、最近は戦争のせいでできなかったが

そんなことを思ってるうちに河原についた

「さて、始めるかな。虚刀流一の構え『鈴蘭』。」

虚刀流の最も基本的な構えをとってから一つずつ技を繰り出す

「虚刀流最終奥義『七花八裂（改）』」

「休みなのに精が出るのう。」

最後の技を出したところで声をかけられる

「秀吉か？どうしたんだ？」

「実は、相談したいことがあったの。」
相談？

「僕にか？」

「お主が一番適役なんじゃ。」

「僕にできることなら手伝うけど？」

「今度、演劇部で新しい劇を行うことになったの。おぬしに題材となる物語を見繕ってもらいたいのじゃ。」

「お安い御用だよ。じゃあ、九時頃にお前の家に集合でいいか？」

「それでいいぞ。じゃあ、また後での。」

「ああ。」

早速、家に帰って準備しないとな

優子視点

「はあ…。」

何回目かわからない溜息をつく

『あいつらがいればそれで十分だよ。木下さん。』

あいつの言葉と幸せそうな顔が頭から離れない

「（なんで、あいつのことがこんなに気になるんだろう。）」

初めて会った時は衝撃的だった。一年の時、秀吉と一緒に不良たちに絡まれた時

『大丈夫か？』

そう言ってアタシたちの前に現れたかと思うと

『虚刀流『七花八裂』！』

あつという間に不良たちを倒してしまった

「（あれから何度か話したけど、こんな気にはならなかったのに…。）」

やっぱり

「好きになっちゃたのかなあ？」

今までこんな気持ちになったことは一度もないから確信は持てない

とりあえず

「ご飯でも食べるかあ……。」「
ベッドからでないと

ガチャツ

玄関が開く音がする。おそらく秀吉だろう

「姉上、やっと起きたのかの。」「

そう言って向かいの席に座る

「こんな朝っぱらからどこ行って来たのよ?」「

服装を見たところ毎朝行っているランニングではないようだ

「ちよつと、トグサの所にの。」「

「っ!（ノノノ）」「

あいつの名前を聞いた瞬間顔が赤くなる

「どうしたのじゃ? 顔が赤いぞ姉上?」「

「な、何でもないわ。（ノノノ）……それよりなんで鑓君のところへ?」

赤くなった顔を何とかごまかしながら聞く

「新しく行つ劇の題材の物語を見繕ってもらおうと思つての。」「

そういえばよく本を読んでたわねあいつ

「で、何に決まつたの?」「

「まだ決まつてないぞい。これからうちに集まつて決めるのじゃ。」「

「はあっ?」「

コイツハイマナントイッタ? コレカラ? ウチデ?

今の自分の姿を見てみる

起きたばかりなので下着以外は着けてない

「っ!（ノノノ）そういうことは早く言いなさいよっ!」「

急いで部屋に戻って着替えないと

ピンポン

「ヤバッ。もう来た?」「

適当な服を見繕つて着替える

「よく来たの。さあ、上がってくれ。」

「おじやます。」

「御茶でも入れるから、適当に座っててくれ。」

「ああ。わかった。」

秀吉と鑓君が話している。お茶を入れるのを手伝えれば自然と話せるだろう

そう思いながら階段を下りてると

「秀吉、この本はなんだ？」

「ああ。それは姉上のじゃ。」

しまった！

急いで階段を駆け下り鑓君の手から乙女小説を奪い取る

「お、お早う。や、鑓君……」

「お、お早う。木下さん。その本は？」

「な、何でもないわ、ただの恋愛小説よ！」

美少年同士の が抜けているがそんなこと言えるはずない

「そ、そうなんだ。」

とりあえずこの本をしまつてこないと

優子視点終了

あの本については詳しくしないでおこう

「緑茶でよかったかの？」

そう思っていたら秀吉がお茶を持ってきてくれた

「ああ。ありがとう。」

「どんな本を持ってきたのじゃ？」

「とりあえず、武者小路実篤の『友情』、ツルゲーネフの『はつ恋』、ロンゴスの『ダフニスとクロエー』の三冊を持ってきた。」

「どんな話なのじゃ？」

「『友情』は脚本家の野島とその親友で小説家の大宮。それと女学生
の杉子の三角関係のお話よね？鑓君。」

本の説明をしようとしたら木下さんが入ってきた

「そうだよ。よく知ってるね?」

「前に一度読んだことがあるの。(／／／)」

顔が若干赤いのはさつき走っていたからだろう

「さすが姉上じゃのう。ほかの二冊も知っておるのか?」

「いいえ。知らないわ。」

「じゃあ、説明するよ。『はつ恋』は40歳代となった主人公ウラジミルが、自分の16歳の頃の初恋について回想する話。ちょっと切ない話だ。『ダフニスとクロエー』は仲のいい幼馴染として育ったダフニスとクロエーがお互いに意識し始めていろいろ悩む話。最後は蜂蜜みたいな甘々のハッピーエンドだけだな。」

簡単に説明する

「少し読んでみてから決めるといいよ。」

「そうじゃのう。姉上も手伝ってくれんかのう?」

「いいわよ。鑢君、一番おススメなのはどれ?」

「『ダフニスとクロエー』かな?」

「わかったわ。」

それからしばらく三人はそれぞれ本を読んでいた

「どれがいいかのう?」

それぞれ一通り読んだところで秀吉が聞いてきた

「僕は『ダフニスとクロエー』がいいと思うぞ。」

「あたしもそう思うわ。」

「そうするかのう。じゃあ、トグサ。シナリオ制作頼むぞい。」

「ああ、わかった。」

そう言いながらノートパソコンを取り出す

「鑢君ってシナリオ書けるのっ!?!」

木下さんが驚いたという顔でこっちを見る

「好きこそ物の上手なれってやつですよ。」

「トグサには何度もお世話になっておるぞ。」

「鑢君って何でもできるのね。」

「何でもはできないよ、できることだけ。」

「そう言いカタカタとシナリオを打ち込んでいく」

「何か手伝うことない？」

「それじゃあ、シナリオに入りたい台詞をいくつか選んで。」

「わかったわ。それじゃあ。」

そうして木下さんが選んだいくつかの台詞を加えながらシナリオを描いていく

「そういえば、トグサ。昼食はどうするんじゃない？」

時計を見ると十二時を少し過ぎていた

「そういえば、考えてなかったな」

「コンビニでなんか買って来ようか？」

「そうじゃのう。ワシらは作れんしのう。」

木下さんたちがそんなことを言う

「キッチンを貸してくればなんか作るよ。」

「え？でも……。」

「手伝ってくれたお礼だよ。」

「姉上。トグサの料理はプロ並みじゃぞ？」

「それじゃ、お言葉に甘えようかな？期待してるよ。」

「期待しててよ。」

笑顔でそういうと、木下さんの顔が少し赤くなった

「……いただきますっ！」「……」

しばらくして出来上がったご飯を三人で食べる

「うまいのう。この唐揚げ。」

「ホント。いつもの唐揚げより味が濃いわね。」

「ザンギっていう北海道の郷土料理だよ。濃い目に下味をつけてるんだ。」

「本当に何でも知っておるのう。」

「何でもは知らないよ、本に書いてあることだけ。」

そんなことを言いながら楽しく昼食を食べた

「できたっ！」

時計を見ると六時を過ぎていた

「それじゃあ、そろそろ帰るかな？」

「終わったのかの？」

「ああ。完成原稿は明日でいいよな？」

「うむ。頼むぞい。」

そう言い玄関に向かう

「もう帰るの？」

「うん。シナリオも書き終わったしね。」

「それじゃ、秀吉、木村「優子」え？」

「いつまでも『木下さん』じゃなくて優子でいいわよ。」

そんなことを言われた

「…わかりました。秀吉、優子さん。また明日。」

「また明日なのじゃ。」

そう言って秀吉は家の中へ戻って行った

「トグサ君？お願いがあるのだけれどいいかしら？」

なぜか呼び方が変わっている

「何？」

「アタシ、読書が趣味なの。だから、お勧めの小説とか貸してもらえないかしら？」

「いいよ。それじゃ、また明日学校で。」

「うん、ありがとね！また明日。」

満面の笑みに顔が熱くなるのがわかった

優子視点

「（お願い聞いてもらえてよかった。これでもっとトグサ君と話せるわね。）」
でも

「（もう一時。もう寝ないと。」

いっこうに眠くならない

「（まるで、クロエーみたいね。」

昼間呼んだ『ダフニスとクロエー』の台詞を思い出す

『今はダフニス（トグサ君）のせいで眠れない』

アタシもあの恋する少女クロエーのように気持ちを伝えることができるのか
な？

優子視点終了

アタシとあいつとクロエーの心（後書き）

女子の視点は難しいですね。

本の紹介には文学少女を参考にしました。

ご意見・ご感想お待ちしております。

僕と異端審問会と二人の帰り道（前書き）

D J - W H I T E さん。感想ありがとうございますこれからもがんばっていきます。

僕と異端審問会と二人の帰り道

アンケート あなたが今欲しいものは何ですか？

姫路瑞希の答え

「クラスメートの思い出」

教師のコメント

なるほど。お客さんの思い出になるような、そういった出し物もいいかもしれませんね。写真館とかも候補になりうると覚えておきます

吉井明久の答え

「カロリー」

教師のコメント

この回答に君の生命の危機が感じられます

鑓十種の答え

「FFF団隔離施設」

君に何があつたんですか？

文月学園の文化祭「清涼祭」の準備が始まりつつある中、僕は今…

『異端者を発見。校舎の壁を駆け上がっています。』

『よし。全員獲物を持ち、それぞれ持ち場につけ！』

『『『はいっ！須川会長！』』』

『異端者を発見、確保し審問会の会場に連れて来い！生死は問わん

！』

『『『はいっ！須川会長！』』』

クラスメイトと鬼ごっこをしています

『これより2・F異端審問会を開催する!』

油断していた。まさか他クラスにも刺客がいたとは横を見ると雄二が転がっている

「(雄二。これはどういうことだ?)」

目で雄二に話しかける

「(目が覚めたかトグサ。こいつらは異端審問会の奴らだ。)」

「(異端審問会?)」

「(簡単に言くと、女子と仲良くした奴をモテない奴らが裁く会だ。)」

「(何やってんだか。あそこの明久もこっち側だろう。)」

「(しょうがないさ。あいつは二人の好意に気付いてないからな。)」

「
やれやれ

『罪状を読み上げたまえ。』

『はっ!須川会長!エー、被告、鑓十種と坂本雄二はAクラスの木下優子と霧島翔子と不純異性交遊の疑いがあります!……………!』

……………!」

話を聞いていると、僕は優子に何回か本を貸していたこと、雄二は霧島さんとのデート(拉致)に関してのことらしい

『御託はいい。結論だけを述べたまえ。』

『女子と仲良くしていたので羨ましいであります!』

『うむ。実にわかりやすい報告だ。』

うむ。実にくだらない理由だ

『異端者、鑓十種並びに坂本雄二。汝らは自らの罪を悔い改め、裁きを受け入れるか?』

「待て!」

雄二が異議を申し立てる。

「やるならこいつだけをやれ!」

噛んでしまったと信じたい

『いいだろう。お望み通り鑢だけやってやる。』

そろそろ殺つてもいいよね？

「言いたいことはそれだけか？」

『その状態で何ができる？』

腕と脚をロープで縛られている。だが

「（ファイレ。）」

小声で腕輪を発動させ召喚獣でロープを切る

「（カット。）」

召喚獣を消して立ち上がる

『どうやってロープを！？……だがこの戦力差では勝てまい！』

まわりには覆面をかぶったクラスメイト達。それぞれ手に獲物を持っている。だが

「僕を相手するには100人（本）ほど足りないぞ。」

『ほざけえっ！！』

「花のように散らせてあげよう。虚刀流『雛罌粟』から『沈丁花』

まで、打撃技混成接続」

五秒ほどでその場に立っているのはトグサと審問会に参加してない

秀吉、美波、姫路の四人だった

「『雛罌粟』から『沈丁花』まで、二百七十二撃。僕が本気だった

ら二百七十二の花は散っていたよ。」

足の下には、ボロボロになった明久と雄二が寝ている

「ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ曰く、『活動的な馬鹿より恐ろしいものはない。』全くその通りだな。』

教室中に転がるバカを見てそうこぼした

「さて。そろそろ『清涼祭』の出し物を決めなくちゃいけないんだが……。」

あの後来た鉄人の命令で出し物を決めることになった

「とりあえず、実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねる。」

雄二は興味なさそうだ

その後何度か横道にそれたが実行委員に任命された美波と副実行委員に決められた吉井の進行により四つの案が出た

- 1、写真館「秘密の覗き部屋」ムツリー二案
- 2、ウエディング喫茶「人生の墓場」横溝案
- 3、中華喫茶「ヨーロッパ」須川案
- 4、演劇「銀河鉄道の夜」秀吉案

1は論外。2は初期投資がでかすぎる。4は秀吉には悪いがこのクラスでできるはずがない。無難なところで3か

そう考えていたら鉄人が来た

「補習の時間を倍にしたほうがいいかもしれんな。」

僕もそう思います

「せ、先生！それは違うんです！」

みんなが抗弁してる間に秀吉に声をかける

「なあ。秀吉。」

「どうしたんじゃ？」

「このクラスで演劇をやるのは不可能だと思うんだが。」

「うむ。そう思ってたのじゃが、お主のシナリオがよくできていての。」

「今回は、『ダフニスとクロエー』だけで我慢してくれ。」

「そうじゃのう。」

秀吉と話しているうちに出し物は中華喫茶に決まった

放課後になりAクラスに向かうと霧島さんに会った

「……鑓、この前はありがとう。…今日はどうしたの？」

「優子さんに本を貸しにね。」

「わかった。…連れてくる。」

「ありがとう、霧島さん。」

しばらくすると優子さんが来た

「はい、優子さん。今朝、渡しそびれた本。」

「あ、ありがとう。ところでこれからなにか用事ある？」

「いや、特にないけど。」

「なら一緒に帰りましょ？」

「今回の本は、どんなお話なの？」

優子さんがそう聞いてきた

「エリナー・ファージョンの自撰集の『ムギと王様』。ファージョンは小さいころから本に囲まれて育った作家で彼女の家には『本の小部屋』なんていう部屋もあったみたいだよ。

彼女は本の中で、

『わたくしに魔法のまどをあけてみせてくれたのは、この部屋です。そのまどから、わたくしは、じぶんの生きる世界や時代とはちがった、またべつの世界や時代をのぞきました。』

と……（略）……と話しすぎちゃったかな？」

横にいる優子さんを見る

「そんなことないよ。とても面白かった。そういえばトグサ君のクラスは清涼祭で何やるの？」

「中華喫茶だよ。そっちはメイド喫茶だよね？」

「うん。必ず来てよ。サービスしてあげるから。」

「了解。必ず行くよ。」

「じゃあ、また明日。」

「また明日。」

そう言ってそれぞれの家に向かった

清涼祭楽しみだな。そのために準備を頑張らないと

「ベンジャミン・ディズレーリ曰く、『行動は必ずしも幸福をもたらさないかも知れないが、行動のない所に、幸福は、生まれない。』

『彼女に対しても行動しないと…。
』
そう呟きながら家に帰った

僕と異端審問会と二人の帰り道（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

僕と優子と清涼祭（前書き）

優しい目で見てやってください。

僕と優子と清涼祭

問 マザーグースの歌で砂糖とスパイスと素敵な何かでできているといわれるものを答えなさい。

鑓十種の答え

「女の子。」

教師のコメント

正解です。ちなみに男の子は、カエルとカタツムリと子犬の尻尾でできているといわれています

吉井明久の答え

「カレーライス」

教師のコメント

女の子は食べ物ではありません

清涼祭初日の朝

僕らの教室は中華風の喫茶店に姿を変えていた

今はムツツリーニと味見用の飲茶と胡麻団子を作っている

「これでいいかな？ムツツリーニ。」

「…完璧。」

「姫路さんが作ったのは明久に食べさせればいいよね？」

「…。(コクコク)」

そう言いながら明久たちの所に行く

「味見用の飲茶と胡麻団子だ。」

「わぁ。美味しそう。」

「トグサ、これウチらが食べちゃっていいの？」

「ああ。」

「では、遠慮なく頂こうかの。」

姫路、美波、秀吉の三人がそれぞれ胡麻団子を頬張る

「お、おいしいです!」

「本当!表面はカリカリ中はモチモチで食感も良いし!」

「甘すぎないところも良いのう。」

三人の感想を聞いていたら

「鑓。ちよつとついてきてくれ。」

鉄人に呼ばれた

「はい。わかりました。みんなちよつと行ってくるよ。」

そう言つて教室から出ていく

『んゴパッ』

何かありえない音が聞こえてきた

「失礼します。」

鉄人とともに学園長室に入る

「よく来たね。」

「教員代行者の仕事ですか?」

「話が早くて助かるよ。あんたには清涼祭の間、西村先生に変装して見回りしてもらふよ。」

「わかりました。でも、演劇部の劇の間は見回りできません。」

「わかったさね。その間はこっちで何とかするよ。」

「では、失礼します。」

みんなに言つとかないと

「あ、戻ってきた。」

明久たちが何か話している

「何話してるんだ?」

「俺たちは召喚大会に出るから、少しの間、喫茶店は秀吉とムツリーニとトグサに任せる。」

「悪い。清涼祭中は鉄人の恰好で見回りしないといけないんだ。」
「え？何で？」

明久が聞いてくる

「これだよ。」

明久たちに紙を見せる

「『教員代行者？』」

みんながよくわからないといった風にこっちを見る

「簡単にいえば、教師の代わりだな。忙しい教師の代わりに僕が変装して授業とか受け持つんだよ。」

「それじゃあ、劇には出られないんかの？」

秀吉が悲しそうな顔でこっちを見る

「大丈夫、その時間は空けてもらった。」

秀吉が胸を撫で下ろす

「それじゃあ、僕はもう行くよ。」

そう言って教室を出る

二時間ほど見回りをしたところで

「バカなお兄ちゃんを知りませんか？」

そんなことを言いながら歩いてく小学生を見つけた
元の姿に戻って話しかけるか。鉄人じゃ怖いし

「どうしたのお譲ちゃん？」

「あ、あの、葉月はお兄ちゃんを探しているんですつ。」

「そのお兄ちゃんの名前はなんていうの？」

「あう……。わからないです……。」

家族の兄じゃないのか？

「じゃあ、何か特徴は？」

「バカなお兄ちゃんでした。」

小学生にバカと言われるのは明久しかいないな

「僕に心当たりがあるから連れて行ってあげるよ、葉月ちゃん。」

「ありがとうございます。やさしいお兄ちゃん。」
僕たちは手をつなぎFクラスを指摘した

「トグサじゃないの。」

「鑓君。見回りはどうしたんですか？」

振り返ると美波と姫路がいた

「ああ。ちよつと迷子を見つけてな。」

「あ、お姉ちゃん。遊びに来たよつ。」

「葉月つ？」

「なんだ美波の妹だったのか。明久を探しているみたいだったからFクラスに連れて行こうとしていたところだ。」

「アキを？」

「吉井君を？」

「葉月、バカなお兄ちゃんを探してましたつ。」

「ああ……。」「」

「じゃあ、後は任せるから。」

「うん、任せて。」

「見回り頑張ってくださいね。」

「やさしいお兄ちゃんありがとうございます。」

「ああ。」

そう言つて三人と別れた

演劇部の劇が終わつた後、優子からメールが来た

『ダフニス役すつごく良かったよ。相手が秀吉だったのが納得いかないけど……。Aクラスにはいつ来てくれるのかな？』

しまった、見回りのこと言うの忘れてた

『ごめん優子さん。学園長から鉄人の代わりに清涼祭中の見回りをするように言われたんだ。バカな奴らが多くて今日は行けそうにない。』

許してくれるかな？そう思つてるとすぐにメールが返ってきた

『わかったわ……。寂しいけど……。でも、明日は絶対来てね！』と待つてるから！』

『寂しいけど……。』その言葉にずきつと胸が痛む
すぐに返信する。

『いつになるかわからないけど、必ず行くよ！』
そう送ると見回りを再開した

優子視点

「はあ。」

必ず行くと言ってくれたけど清涼祭中には無理だろう

「苦しいな……。」

今まで経験したことのない痛みが胸を刺す

こんな思いをしてるのはアタシだけなのかな？

優子視点終了

その後いろいろあったが何とか一日目と二日目を終えることができた
明久たちが花火で教頭室を壊したことを鉄人に怒られている間に学
園長室に行く

「失礼します。」

「ご苦労だったね。あんたとバカどものおかげでいろいろと助かったよ。」

「ええ、おかげで清涼祭を楽しむことはできませんでした。」

「悪かったと思っているさ。お詫びと言っちゃなんだが教頭室から
学食一年間無料券や商店街の商品券、図書券、カラオケや映画館等
の娯楽施設の割引券等出てきたからこれをやるさね。」

「……………わかりました。それでは失礼します。」

学園長室から出ると秀吉がいた

「どうしたんだ？秀吉。」

「もう、打ち上げが始まっておるぞい。おぬしも早く参加するのじや。」

時計を見ると、六時五十五分だった。まだいるかな？

「悪い秀吉。先約があるんだ。」

「わかった、みんなにはワシから言っておくぞい。」

「ありがとう。」

そう言つてAクラスへ向けて走り出す

優子視点

「アタシ、何やってんだろ？」

教室で一人、メイド服に身を包んでいる

「きつと、Fクラスの打ち上げに行つたのね…。」

時計を見るともうすぐ七時になる。見回りはとくに終わっているはずだ

もう帰ろうかな…

そう思い立ち上がると

ガラッ

彼がいた

「まだやってるかな？」

乱れた息を整えるとそんなことを言った

「おかえりなさいませ、ご主人さま。こちらの席へどうぞ…。」

おそらく赤くなっているであろう自分の目を見せないように席へ案内する

「ご注文をどうぞ…。」

何を言ってるんだ、アタシは？お菓子も飲み物も何も残ってないのに…。

顔を伏せながらそう言う

「木下優子さんの笑顔はないかな？昨日から一度も見えてないんだ。」

涙が溢れてきた。けどそのまま顔を上げる。たとえ涙が流れていても、今、アタシは笑ってるのがわかるから

「んっ!？」

顔を上げると彼の顔が目の前にあり、アタシの唇が何かによって塞がれた

「……………。ん————っ!？」

キスだと気付くのに四秒ほどかった

「ぶはあっ。はあ、はあ、っどういうつもりよ!」

真っ赤な顔で問い詰める

「好きな人…、いや、大好きな人と少しでも近くにいたかったただけだけど？」

ダイスキナヒト？

「木下優子さん。あなたのことが好きです、大好きです。」

止まっていた涙が

「僕と付き合ってください。」

また流れ出す

「卑怯よ……。こんなことされて、そんなこと言われたら……。今までよりもっと好きになっちゃうじゃない！」

「フレッチャー曰く、『恋と戦争においてはあらゆる戦術が許される。』別に卑怯じゃないさ。」

「アタシがどれだけ苦しんだか知らないくせに……。」

「僕がどれだけ苦しんだか君は知らないだろう？それより……。」
どうしたんだろ？

「秀吉。出てこい。」

秀吉！？

ドアのほうを見ると秀吉がいた

「あ、あんた。どうしてここにっ！？」

「トグサのことが気になってのう……。」

今までの全部聞かれてた！？

「ワシは先に帰ってるからの。トグサ、姉上のこと頼むぞい。姉上、明日は休みじゃし、トグサのうちに泊まってきたらどうじゃ？」

「な！？何言ってるのよ！」

「そうだぞ！秀吉！」

「はっはっはっ。二人とも顔が赤いぞい。」

そんなことを言いながら走って行った。

家に帰ったらお仕置きね

「優子。明日なんか用事あるか？」

「ないけどなんで？」

「映画と喫茶店の割引券があるんだ。一緒に行かないか？」

「それはデートのお誘い？」

「それ以外に何がある？」

「それもそうね。」

「で、返事は？」

「もちろん、YESよ。」

「じゃあ、集合場所は…。」

「あなたの家に、今からね。」

「はぁ！？」

彼は五分ほど固まっていた

アタシのファーストキスを奪った罰よ

今夜は寝かせてあげないんだから！

優子視点終了

僕と優子と清涼祭（後書き）

ご意見・ご感想をお待ちしております。

僕とお弁当と盗撮疑惑（前書き）

優しい目で見てやってください。

僕とお弁当と盗撮疑惑

問 ()に入る言葉を入れなさい。「()の多い生涯を送ってきた。」

姫路瑞希の答え

「恥」

教師のコメント

正解です

鑓十種の答え

「本」

教師のコメント

君のことは聞いていません

吉井明久の答え

「バカと呼ばれること」

教師のコメント

しょうがないことです

土屋康太の答え

「被写体」

教師のコメント

何を撮っているか非常に気になります

今、僕はリムジンバスで合宿所に向かっていきます

Aクラスの人が二人欠席したため、僕と僕がさらった雄二がAクラスと一緒に行くことになった

「おろせ！今すぐおろせ！俺はこんなとこに居たくない！」

「はっはー、元気いいなあ、何かいいことでもあったのかい？」

「お前はいいよなあ！彼女といられて！」

「何を言ってるんだ？雄二にもいるじゃないか。」

「一般的に、相手にアイアンクローを決める奴を彼女とは言わない！」

「夫婦と呼ぶのか！？」

「……雄二は大胆。」

「顔を赤くしながら力を込めるなああああつ！！」

「トグサ、何読んでるの？」

隣に座る優子が聞いてくる

「『好色五人女』」

「ええ！？（／＼／）」

「興味あるなあ。僕にも聞かせてくれない？」

優子が顔を赤くし、工藤愛子が話に加わってきた

「勘違いしてるようだけど、いかがわしい内容じゃないぞ。」

「え？そうなの？」

工藤が残念そうな顔で聞いてくる

「現代風にいえば、「恋に生きた女たち」もしくは「愛に燃えた女たち」になるな。」

「へえ〜。」

「『好色五人女』は井原西鶴が書いた通俗小説みたいなものだ。タイトル通り五人の女性の物語でできている。五つの物語の中でハッピーエンドは一つただけけど、ほかの四つの物語に、不思議と悲壮感は少ない。なぜなら、この物語に登場するヒロインたちは、誰もが自分の心の望むままに行動し、欲しいものはつきりと主張し、自分を哀れんだり言い訳をしないからだ。」

「面白そうだね。今度貸してくれないかな？」

「別に今からでもいいぞ？ほかにもたくさんあるからな。」

「ありがと。向こうに着いたら読ませてもらっね。」

「ああ。読んだら感想を聞かせてくれ。」

「ねえ。そろそろご飯にしない。」

優子がそう提案してくる。時計を見ると十二時五分。丁度いい時間だ

「そうだな。みんなで食べるか。」

「あれえゝ？いいのかな？二人きりじゃなくて？」

工藤がからかってくるが

「二人で食べるのもいいが、ご飯はみんなで食べたほうがおいしい
だろ？それとも工藤は僕たちと食べたくないのか？」

「もつとあわてると思ったんだけどねえ。それじゃあ代表たちを呼
んでくるよ。」

僕と優子、霧島さんと雄二、工藤の五人で昼食をとることにする

「……いただきます。」

「あいからわず、トグサの弁当は美味しいわね。」

「僕にも、ちよーだい。」

「……おいしい。」

「うまいな。」

「霧島さんのものおいしいよ。」

「……翔子でいい。」

霧島さんがそんなことを言ってきた

「えっと、理由は？」

「いつも私の応援をしてくれる、トグサはいい人。」

「なら、僕も愛子でいいよ。」

「翔子に愛子でいいのか？」

「いいよ。」

「……うん。」

そう言つて翔子は雄二のほうを見た

「……雄二。あーん。……どうしてよけるの？」

「今のを避けなかったら串刺しになってたんだが！？」

確かに空気を切る音が聞こえた

「ト、トグサ。あーん。」

「赤くなるなら辞めろよ。」

「そう言いながらもしっかり食べる

「お、おいしい?」

「作ったのは僕なんだけど

「さて、デザートにするか。」

「デザートも作ってきたの?」

「僕甘いものは好きだよ。」

「……………楽しみ。」

「お前は何でもできるな。」

「何でもはできないよ、できることだけ。……………はい、シュークリームです。」

「雄二に答えながらシュークリームを出す

「……………おいしい。」

「なら良かった

「優子、ほっぺにクリームついてるぞ。」

「え?どこ?」

「とつてやるから動くな。」

「指でクリームを取りそのまま自分でなめる

「ト、トグサも付いてるわよ。(ノノノ)」

「そう言つて僕と同じことをする

「……………雄二」とれたから心配すんな。」「いじわる。」

「雄二は霧島さんにクリームを取られる前にハンカチで拭きとった

「……………」

「その後、しばらく雑談をし合宿所に着いた

「明久たちが「お尻にやけどの跡がある女生徒」を探す作戦を考えていると

「ドバン!

「全員手を後ろに組んで伏せなさい！」

女子がぞろぞろと中に入ってきた

「な、何事じゃ!？」

「木下はこつちへ! そつちのバカ三人は抵抗をやめなさい! あなたは本を読むのをやめなさい！」

仕方ないので本を閉じる。明久たちも窓を閉め女子たちに向き合う

「元気いいねえ、なんかいいことでもあったのかい？」

「仰々しくぞろぞろと、一体何の真似だ？」

「よくもまあ、そんなシラが切れるものね。あなたたちが犯人だつてわかつてるのよ。」

雄二が聞くと、Ｃクラス代表の小山さんが出てきて言った

「犯人? 犯人つて何のことさ？」

「これよ。」

明久の疑問に何やら小型の機械を見せる小山さん

「……………ＣＣＤカメラと小型集音マイク。」

ムツリーニが答える

「女子風呂の脱衣所に設置されていたの。」

何だそんなことが

また本を読み始める

すると

「ねえ。」

優子が話しかけてきた

「どうした。」

「トグサは、関係ないよね？」

「ああ。見たかったら優子がいるしな。」

「な、何言ってるのよ!?(ノノノ)」

「なんだ見せてくれないのか？」

「……………せてあげるわよ。(ノノノ)」

顔を真っ赤にしながら優子が答える

「安心しろ。優子を傷つけることはしない。」

「信じてるわよ。」

そう言って部屋から出て行った

さてと

「「「ぎゃああああああああああっつ！……！」」「」

三人の無事を祈ろうか

僕とお弁当と盗撮疑惑（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

僕と録音機と声真似（前書き）

優しい目で見てやってください。

僕と録音機と声真似

問 「（ ）は考える葦である。」（ ）に入る言葉を入れなさい。

姫路瑞希の答え

「人間」

教師のコメント

正解です。パスカルの言葉ですね

鑓十種の答え

「人間はひとくきの葦にすぎない。自然の中で最も弱いものである。だが、それ」

「Human being is a reed of one stalk. It is the weakest existence naturally. However, it is a thinking reed」.

教師のコメント

完璧です。英文も調べてみたら正解でした

吉井明久の答え

「草冠に葦」

教師のコメント

君にしては考えましたね

「トグサも覗きに行くよ!」

明久がそんなことを言ってきた

「僕は行かない。」

「どうしてさ!?!」

「僕は教師代行者で優子の彼氏だ。本来ならお前らを止めないといけない。」

「そんな……。」

「明久、トグサにも事情があるんだ。」

「今までの会話は聞かなかったことにする。さっさと行け。」

「えっ？」

「早く行けと言っている。それともここで捕まりたいか？」

「ありがとう、トグサ！」

そう言つて四人は覗きに行つた

「まったく……。」

一時間後、みんな疲れた顔で戻ってきた

強化合宿二日目。

「……雄二。一緒に勉強できてうれしい。」

「待て翔子、当然のように俺の膝に乘ろうとするな。クラスの連中が靴を脱いで俺を狙っている。」

「トグサこの問題なんだけど……。」

「そこは直接代入せず……。」

雄二たちが明久たちの所に移動したので僕たちも移動する

雄二が明久の疑問に答えていると、愛子が来た

「あ、代表に優子、トグサ君もここにいたんだ。それなら僕もここにしようかな？」

「工藤さん、だっけ？」

「そうだよ。君は吉井君だったよね？久しぶり。」

そういえばこの二人に接点はあまりなかったな

「それじゃ、改めて自己紹介させてもらうね。Aクラスの工藤愛子です。趣味は水泳と音楽鑑賞で、スリーサイズは上から78・56・79、特技はパンチラで好きな食べ物はシュークリームだよ。」

「ん、どうしたの吉井君？」

「いや別に工藤さんの特技を疑ってるわけじゃないんだ。ただ、そ

の……。」

明久たちがしゃべっている間、優子と問題を解いていると

《工藤さん》《僕》《こんなドキドキしてるんだ》《やらない？》
問題発言が聞こえた

明久たちのほうを見ると、愛子が小さな機械をいじっていたおそらく小型録音機だろう

「愛子は何やってんのよ……。」

優子が頭を抱えている

「いいじゃないか。面白いし。」

その後、明久が「お尻が好き。」「お尻を見せて。」などの発言（九割は愛子のいたずら）によって変態レベルがものすごい勢いで上がった

「……工藤愛子。おふざけが過ぎる。」

どうやらムツツリー二も加わるようだ。会話を聞いてみよう

「姫路さん。美波。よく聞いて。さっきのは誤解で、僕は《お尻が好き》って言いたかったんだ。《特に雄二》《の》《が好き》ってムツツリーニイーツ！後半はキサマの仕業だな！？うまくやって、工藤さんよりも上手に『僕のお尻に突っ込むこと』って僕はこんなこと言ってないよ！？」

「くっ！さすがはムツツリー二君！」

「……最後のはトグサだな？」

「録音機じゃ限界があるってことさ。」

「トグサまで！？」

「……吉井。雄二は渡さない。」

「アキ……。そんなに坂本のお尻がいいの？ウチのじゃダメなの？」

「前からわかっていたことですけど、そうはつきり言われるとショックです。」

「二人ともどうしてすぐに僕を同性愛者扱いするの！？僕にそんな趣味は……。」

「同性愛を馬鹿にしないでくださいっ！」

（中略）

「性別なんか関係ない、ですか。」

「あのね姫路さん。その台詞を呟きながら僕と雄二を交互に見るのはやめてもらえるかな？きつと君は誤解しているよ？知つてのとおり、僕は《秀吉》《が好き》なんだってちよつと？」

「け、けど、誤解しないでね？僕は秀吉の《特に》《お尻が好き》なんだってこれだと余計に誤解を招くよね！？ムツツリー二と工藤さん、とにかく『君たちのお尻』をこっちに渡しなさい！ってトグサ！？」

「あ、明久。ワシはどんな返事をしたらいいのじゃ？」

「しまった！もう手遅れ！？こうなったら、《久保君》《雄二と》《交互に》《お尻を見せて》『秀吉とムツツリー二はパンツを僕にくれないか？』違う！どうしてこの場面で『僕の胸』を見せる必要があるのさ！っていやあああつ！」

「吉井君。そういうのは少々困る。物事には順序というものがあるし、まだ心の準備ができてない。」

「わかつてる！『だけど君たちに僕の胸を見てほしいんだ』ってトグサああ！」

「アキ、アンタやっぱり女より男の方が…。」

「だからどうしてみんな『僕の裸を見てくれないの！？』落ち着いて僕の『すべてを見て』ってもういやだ！」

「大丈夫です、吉井君しつかり見てあげます！」

「違うんだ、姫路さん。今のは『僕の本能』がしゃべったことであつて『僕の理性はみんなの裸を見てみたいんだ！』トグサアッ！」

結局、この騒ぎは鉄人が来るまで続いた

明久はその後教室の隅で声を殺して泣いていた

僕と録音機と声真似（後書き）

明久がかなりの変態になってしまいました。
ご意見感想お待ちしております。

僕と覚悟とそれぞれの夜（前書き）

優しい目で見てやってください。

僕と覚悟とそれぞれの夜

問 1 , 1 , 2 , 3 , 5 , 8 , : と続く数列の名称を答えなさい

鑓十種の答え

「フィボナッチ数列」

教師のコメント

正解です

吉井明久の答え

「いい兄さん数列」

教師のコメント

いい兄さんは関係ありません

『おおおっ！障害は排除だーっ！』

『邪魔する奴は誰であれぶち殺せーっ！』

『サーチ&デス！』

変態が編隊を組んで女子風呂に来た

「そこまです！薄汚い豚ども！この先は男子禁制の場所！大人しく引き返しなさい！」

「し、清水さん！あと、その他女子多数！？」

そこにいたのは清水さん率いる召喚獣部隊だった

「吉井。数も質も、圧倒的にこちらが不利だ…！」

「清水さんお願いだ！そこをどいて欲しい！」

「だめです！ここから先には通しません！」

「気にするな！女子の召喚獣なんかじゃ俺たちは止められない！行くぞ！」

「『『才おつ！！』』」

Fクラスの奴らが女子風呂に向かって走り出した

「あつ！待つんだ皆！」

だが

「虚刀流一の奥義『鏡花水月』」

「教育的指導っ！」

「ぐはっ！」

「ふぐうっ！」

掌底と拳によつて阻まれた

『トグサと鉄人だ！？』

『奴らを生身で越えないといけないのか！？』

『バカを言うな！そんなの無理に決まっているだろ！？』

Fクラスの奴らは動揺を隠せないようだ

「トグサ！どうして君がそこに！？僕たち友達じゃなかったのか！？」

「エルバード・ハーバード曰く、『友人とは、あなたについてすべてのことを知っていて、それにもかかわらずあなたを好んでいる人のことである。』確かにこんなことをするお前たちのことは嫌じゃない。」

大切な彼女を思い浮かべる

「だったら…！」

「ウィリアム・シェイクスピア曰く、『友情は不変といってよいが色と恋が絡めば話は別になる。』彼女を守るためならお前たちを裏切ろう。」

「その考えが変わることはないんだね？」

「僕のことはよく知っているだろ？」

「そうだね。」

「構える明久。おしゃべりはここまでだ。」

「トグサ……。」

「吉井っ！諦めるな！悔しくてもこの場は引いて力を蓄えろ！今日がだめでも、明日にはチャンスがあるはずだ！」

明久を庇うようにFクラスの皆が構えた

「皆ごめん。いつか理想郷にたどりつくことを誓うから。」

そう言つて数人仲間を引き連れて走つて行つた

僕の前には七人残っている

「お前たちの覚悟は見せてもらった。来い！」

「行くぞ！」

「……………おおっ！」「……………」

「俺たちは理想郷にたどりつくんだーっ！」

七人が向かってくる

「ただしその頃には、お前たちは八つ裂きになっているだろうけどな。」

「……………おおおおおおっ！！」「……………」

「虚刀流最終奥義『七花八裂（改）』！」

体の内部に衝撃を与える拳を

最速の掌底を

体の外部にのみ衝撃を与える掌底を

足を斧刀に見立てた踵落としを

下から打ち上げる膝蹴りを

両手で放つ水平手刀を

相手を刺す貫手を

それぞれに放つ！

「くくくくくくはあっ！！！！」「」「」「」「」

こうして合宿の二日目は終わった

明久の部屋

「トグサ、帰ってこなかったね。」

「あんなこと言った後だ、今頃先生のところにも行ってるんだろ
う。」

「どうしてトグサは僕たちを裏切ったんだろう？」

「彼女に教員代行者、それに脅迫されてもないし俺達の味方になる
必要もないだろ。」

「……………。（コクコク）」

「姉上に危害がなければトグサは手を出さないとはいさずじゃ。」

「明日からはそこについても考えるか。」

優子の部屋

「そつえば代表に愛子すぐにお風呂から出てたけどどうしたの？」

「……雄二にお仕置き。」

「Fクラスの皆が覗きに來てたからその見学。」

「何に考えてんのかしらあいつら。」

「ボクたちの裸でしょ？」

「トグサは？」

「ボクたちを守ってたよ。『彼女を守るためならお前たちを裏切ろ
う。』だってさ。」

「そう。（／／／）」

鉄人の部屋

「良かったのか？あいつらを裏切って。」

「教師が覗きを進めてどうするんですか。」

「それもそうだが。」

「こんなことで壊れるほどあいつらとの友情は脆くないつもりです。」

「

「そうか。」

「それじゃあ、おやすみなさい。」

「ああ。」

こうして夜が更けていく

僕と覚悟とそれぞれの夜（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

僕と約束と神原駿河（前書き）

ネタが思いつかないのでバカテストはしばらくお休みです。

僕と約束と神原駿河

合宿三日目

今日も優子と一緒に自習をしていた

「トグサ、昨日秀吉たちと戦ったって聞いたけど大丈夫なの？」

「大丈夫だよ。この程度で壊れる関係なら最初から友達にならないよ。」

「なら、なんで部屋に戻ってこなかったんじゃ？」

優子と話していると秀吉がやってきた

「僕がいたんじゃ作戦会議もできなかっただろ。」

「それもそうじゃが…。」

「で？僕を勧誘しに来たのか？」

「いや、できればそうしたいのじゃが、無理じゃろう？」

「無理だな。」

「それでじゃ、姉上にはワシが入るはずじゃった個室風呂に入ってもらいたいのじゃ。」

「アタシ？」

「なるほど。優子を覗かない代わりに僕に手を出さないで欲しいということか。」

「そのとおりじゃ。」

「わかった。秀吉たちの邪魔はしない。」

「ありがとうなのじゃ。」

そう言って秀吉は明久たちの所に戻って行った

「ねえ、やっぱり秀吉たちの手伝いしたいの？」

「どうしてそんなことを言うんだ？」

「ちよっと寂しそうな顔をしてたから…。」

そんなつもりなかったんだが

「まあ、覗きに興味はないけどあいつらといっしょに騒げないのは寂しいかな？」

「ほかの女の子たちのことを覗かないなら秀吉たちの手伝いしても良いよ。」

「いいのか？」

「約束してくれるなら。」

優子が小指を出してきた

その小指に自分の小指をからませて優子に言う

「この約束は必ず守ろう。」

そついうと優子はまぶしい笑顔を僕にくれた

「ありがとう。さあ、勉強を続けましょう。」

「そうだな。」

その日の夜

「あなたたちには社会のルールについてたつぷりと指導する必要があるありますね。」

「よりもよって、引率は学年主任の高橋女史か…！」

現場に着くと雄二たちが高橋女史たちと愛子たちに囲まれていた

「皆！最後まで諦めずに戦うんだ！試験召かけふうっ！？」

高橋女史に戦いを挑もうとしていた明久を蹴り飛ばす

「何すんだよ！？って誰！？」

「神原駿河だ。」

一応変装をしている。知らない人は化物語を呼んでくれ

「えっと…。」

「神原駿河。得意技は二段ジャンプだ。」

「本当っ！？」

「神原駿河なんて生徒はいなかったはずです。あなたは何者ですか？」

高橋女史が聞いてくるが正体を明かすわけには行けない

「私は明るいエロを追及するものだ！」

「な、なんだこの胸の高鳴りは！？」

『恋！？これが恋なのか！？』

『駿河さん俺と結婚してくれ！』

D・E・Fクラスの男子が騒ぎ始めた

「なんか、ボクと気が合いそうだね。」

「そういうことは聞いていません。」

「細かいことは気にしないでくれ。」

「そうですね。彼らに手を貸すならあなたにも容赦しません。」

「望むところだ！試験召喚！」

黄色い雨合羽を着た自分が出てくる

『学年主任 高橋洋子 VS ??? 神原駿河』

『総合科目 7791点 VS 6699点』

「行くぞ！」

的を絞らせないように敵の周りを回る

「甘いですよ。」

足に痛みが来る

「どんなに早く動けても、足をつぶせばこちらのものです。」

「さすがは高橋先生だ。一瞬にして私の考えを見破るとは……。」

「降参しますか？」

「そうだな。今の私では勝てないな。」

「仕方がない。こうなっただからには、各自の判断で行動しろ！」

僕が負けを認めた瞬間雄二がそう言った

『『『おうっ！任せておけっ！』』』

『……………』

こんなきれいな土下座は初めて見た

雄二たちは土下座をせずにいたが翔子さんたちにお仕置きされていた

「神原駿河さんでしたか？話を聞きたいのでついてきてもらいますか？」

「神原駿河。主な武器は加速装置だ！」

そう言い、壁を走って逃げる。明久たちには悪いがここで捕まるわけにはいかない

「な！？待ちなさい！」

その後、明久の部屋に行こうとすると数人の女子が部屋からこそそそと出てきた

とりあえず入るか

「神原駿河だ。吉井先輩はいるか？」

「明久は雄二と一緒に鉄人から逃げておるぞ。ところでお主は誰じゃ？」

「……………き、貴様は神原駿河！？」

「ムツツリー二知っておるのか？」

「……………今日の作戦で高橋女史と戦った謎の女子だ。」

「ちよつと押入れを借りるが構わないか？」

「構わないが……………」

「でわ、失礼する。」

元の姿に戻り服を着替える

「さてと。明日はどんな作戦で行くんだ？」

「トグサどうしてここに！？」

「優子にほかの女子を覗かないなら手を貸していいってさ。」

「本当かの？」

「ああ。」

「良かったのじゃっ！」

そう言って秀吉が抱きついてきた

「うれしいのはわかるがもう寝るぞ。」

「そうじゃの。」

「……………（コクコク）」

合宿四日目終了

僕と約束と神原駿河（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

僕と鎧と次の日の朝（前書き）

感想ありがとうございます。化物語と刀語のキャラは積極的に出す
と思います。

僕と鎧と次の日の朝

「ふぁ……あふ……。」

「流石に眠いぞ……。」

明久と雄二が死ぬほど眠そうな顔をしている

「全くそんなことで今夜は大丈夫なのか？」

「気合いさえはいれば何とか……ふわぁぁあ……。」

「俺はもう駄目……ふおおおおお……！」

雄二が写真を見て一気に覚醒した

「……効果は抜群。」

「あ、ムツリーニ。おはよう。」

「ムツリーニ。いましがた雄二に見せたのはなんじゃ？えらく興奮して居るように見えるのじゃが？」

「……魔法の写真。」

「どれ、ワシらにもその写真を見せてくれんかの？」

「……。(スッ)」

四枚の写真をこちらに渡してくる

一枚目は姫路と秀吉のツーショット

二枚目は翔子と美波のツーショット

三枚目はセーラー服姿の明久

四枚目は誇らしげに胸を張っている神原駿河

写真を見ているとムツリーニが手招きしていた

「どうしたムツリーニ？」

「……合宿が終わったらモデルをやってほしい。」

「利益の半分くれるならいろんな女の子の姿でモデルをやってやるよ。」

「……交渉成立。」

がつちりと握手を交わした

周りを見渡すと

『ふおおおおおおおー！ー！ー！ー！』

至る所で男子が覚醒していた

その日の夜

三階・二階・一階を全てクラスの男子の力を借りついに高橋女史の前までやってきた

「雄二っ！トグサっ！」

「わかつている！明久、ムツッリーニ！階段へ向かって走れっ！」

「まさかAクラスの皆まで協力するとは思いませんでしたが、問題はありません。ここは誰であろうと通しませんから。試験召喚。」

「高橋女史！悪いがここは通らせてもらうぜ！行くぞ、起動っ！」

「干渉ですか！ー！やってくれましたね坂本君！ー！」

「行け明久っ！鉄人を倒して、俺達を理想郷に導いてくれ！」

「任せとけっ！」

さて、やっとなる僕の出番か

「高橋女史。昨日の借り返させてもらうっ！試験召喚！」

そうして現れる僕の召喚獣。姿は昨日のままだ

「その召喚獣はっ！？そうですか昨日のあれは鑢君でしたか。ですが私を倒せますか？」

「昨日とは違うってことを見せてやるっ！十三人の剣士！賊刀「鎧」！」

僕の召喚獣が光に包まれる

光がおさまるとそこには巨大な鎧武者がいた

校倉必…薩摩の濁音港を一手に仕切る、鎧海賊団の船長。

「姿が変わろうと私は負けません！」

高橋女史が鞭をふるってくるが鎧はすべてをはじく

「っ！？攻撃が効いてない？」

「賊刀「鎧」は受けた攻撃の衝撃を、内ではなく外へ逃がす刀だ。ダメージを与えるには鎧がどこにも接していない空中で攻撃するしかない。」

「自ら弱点を言っていていいんですか？」

「あなたの鞭じゃ鎧を持ち上げることはできない。昨日のようにはいきませんよ。」

話している最中も鞭が襲ってくるがダメージはない

「こつちも行きますよ。『否崩れ』」

鎧姿での体当たり

「ただの体当たりですか…。っ！？」

高橋女史の召喚獣が横に跳ぶ

「確かにただの体当たりですが…ただの鎧ではありませんよ。『後ご如しく』」

賊刀「鎧」は部品のそれぞれの継ぎ目が鋭利な刃になっている

「確かに昨日とは違うようですな…。」

高橋女史は何度も攻撃を避けているが完全にはかわせてない

「これで最後だっ！『刀賊？』！」

全速全力の体当たりを放つ！

「くっ！」

高橋女史の召喚獣が跳ね飛ばされる

「僕の勝ちですね。」

「ええ。そうですね…。」

『『『うおおおおおー！っ！！！』』』

高橋女史が負けを認めた瞬間、男子たちが女子風呂に向けて走り出した

「元氣いいねえ！君たちなんかいなことでもあったのかい？」

そう言い部屋に向けて歩き出した

「待ってください。あなたは行かないのですか？」

高橋女史がそう聞いてくる

「僕は友達の手伝いがしたかっただけ、それに大切な人とも約束しましたからね。」

「大切な人？」

「ええ。ちゃんと約束は守ったぞ優子。」

前から走ってきた優子にそう言う

「そうみたいね。」

「なるほど惚れたら負けということですか？」

高橋女史が微笑みながら聞いてくる

「勝負になりませんよ。お互いがお互いに惚れてますからね。」

「そうですか。鑢君彼女を大事にしないと許しませんよ。」

「キプリング曰く、『私がお前を愛することく、お前も私を愛するならば、我々の恋を切り裂くナイフがあるうか。』心配はいりません。」

「そのようですね。」

『割にあわねえーつつ！！』

「そう言えば今の時間は学園長が入っていましたね。」

処分通知 文月学園第二学年2名（木下秀吉、鑢十種）を除く全男子生徒総勢148名 上記の者たち全員を1週間の停学処分とする

文月学園学園長 藤堂カヲル

『ついムラツときてやった。今は心の底から後悔している。』
（とある生徒の反省文より抜粋）

たっ、たっ、たっ、たっ、たっ、たっ、たっ、たっ

「あ、鑓君？、おはようございます。」

「トグサ？、おはよう。」

「トグサ、なんでその姿なんじゃ？」

僕は今、神原駿河の姿になっている

「おはよう、秀吉先輩たち。この体は意外と動きやすくてな。」

「どうして先輩なんですか？」

「秀吉先輩ならわかると思うがキャラになりきっているんだ。」

「キャラねえ。」

「設定としては、「甘言褒舌」と称される程のプラス思考で美化と言って良いほどやたらと相手を褒め讃え、勤勉で人当たりも良く爽やかな性格の後輩。実はBL好きな腐女子。更に、同性愛者、マゾ、露出狂で欲求不満で、自身もそれを自認する。という設定だ。」

「どんな設定よっ！？バカじゃないの！」

「バカじゃないのか…いいぞもつと言ってくれ。」

「完璧になりきっておるのう。」

「あはは…。」

「まあ、教室に戻ったら辞めるからそれまで我慢してくれ先輩たち。」

「それにしてもすごくきれいな体ですね。余分なものが無いというか…。」

「かなり鍛えているからな。」

「どれくらいですか？」

「まず毎朝10キロダッシュを2セット。」

「もういいです。」

「そろそろHRの時間だぞ先輩たち。」

「そうね、これから1週間、ウチら4人だけだけど仲良くやりましょ。」

「はい、こちらこそよろしくお願いします。」

「よろしく頼むぞい。」

「よろしく頼むぞ先輩たち。」

そう言って僕たちは校舎に向けて走り出した。

僕と鎧と次の日の朝（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

ワシと姉上と迷子（前書き）

今回は秀吉視点で会話中心です。

ワシと姉上と迷子

「姉上と登校するなんて久しぶりじゃのう。」

「そうね。」

「トグサはどうしたんじゃ？」

「やりたいことがあるから先に行くつて。」

「やりたいことのう……。ん？」

前を見るとツインテールで大きなリュックをしょった小学生くらいの子がいた

「姉上、あれは迷子かのう？」

「時間もまだあるし、アンタ聞いてきなさい。」

「人使いが荒いのう……。」

一度目

「お主、迷子かの？」

「話しかけないでください。あなたのことが嫌いです。」

「……………」

「どうしたのよ？」

「すごく傷ついたのじゃ……………」

「わけわからないこと言っただけでもないでもう一度行きなさい！」

二度目

「おい、お主。」

「……………」

「迷子じゃろ？どこに行きたいのかの？」

「……………」

「そのメモちょっと見せてみるのじゃ。」

「……………」

「……………」
「……………」

「どうしたのよ？」

「無視されたのじゃ…。小学生女子にシカトされたのじゃ…。」

「つ、次は大丈夫よ！行つてきなさい！」

三度目

「なあ、お主。」

ポンツと肩に手を置く

「なんですかセクハラですか？」

「違うのじゃ！お主が困っているようなのでな、力になれると思つてのう。」

「爺言葉を使う女の人の助けはいりません！」

「ワシは男じゃっ！」

「女の子みたいな顔ですね。女臭いですっ！近寄らないでくださいっ！」

「女子にそれを言われるとかなりこたえるのじゃ…。」
なんか目の前がにじんで…

「あんた何泣いてんのよ…。」

「あ、姉上。女臭いと言われたのじゃ…。」

「はあ、一緒に行つてあげるわよ。」

四度目

「お主…。」

「臭いですっ！近寄らないでくださいっ！」

「女臭いより酷くなつたのじゃ…。」

「確かに臭いは言いすぎでした訂正します。水臭いですっ！近寄らないでくださいっ！」

「意味が前後で支離滅裂なのじゃが…。」

「ねえ、あなたの名前は？」

「わたしは、八九寺真宵と言います。」

「あなた迷子？」

「はい。」

「この差はなんなのじゃ」

「爺言葉を使う女の子がいたら警戒します。」

「ワシは男じゃと言っておろう！」

「で、あなたはどこに行きたいの？」

「文月学園です。」

そう言えば

「お主学校に行かなくてよいのかの？」

「今日は創立記念日だからお休みです。えっと…」

「そう言えば自己紹介がまだだったのう。ワシは木下秀吉じゃ。」

「わたしは木下優子よ。」

「優子さんと木下さんですか。」

「待て。なぜワシは名字なんじゃ？」

「意味はありません。」

「それじゃ、真宵ちゃん。行こうかお姉ちゃんたちが連れて行つてあげる。」

「はい！」

前では八九寺が姉上と楽しそうに歩いておる。このままというのは納得いかん何とか好感度を上げるのじゃ

「八九寺、なぞなぞでもするか？」

「受けて立ちましょう。」

「頭は二つ、目は三つ。口は四つで歯は百本。手が七本に足が五本、像を丸のみできる小さな動物は、なーんじゃ？」

「…木下さんのお友達ですか？」

ものすごい切り返しが来た

「そんなのいるかでイルカじゃ！て言うかいるわけなからうそんな友達。いたら嫌じゃ。」

「外見で判断するなんてひどい人ですね。」

「むっ。」

それもそうじゃの

「ではこちらからもなぞなぞです。頭は猿で胴は狸、手足は虎で尾は蛇、鳴き声はトラツグミな動物は、なーんだ？」

「そんなのいるかで、イルカじゃろ？」

「鵜です。」

一本取られたの

「よく鵜なんて知っておったの。」

「色々と勉強中です。」

「そうかの。」

「それはそうと、気の毒さん。」

「色々と泣きそうになるのでその呼び方はやめてくれ。ワシの名前は木下じゃ。」

「失礼。噛みました。」

「気分の悪くなる噛み方はしないで欲しいのう。」

「仕方がありません。誰だっていい間違いをすることくらいはあります。それとも木下さんは生まれてから一度も噛んだことがないというのですか？」

「人の名前を噛んだことはないぞ。」

「では、農商務省特許局、日本銀行国庫局、専売特許許可局、東京特許許可局と三回言ってください。」

「人の名前じゃないのじゃが！？」

「人の名前です。知り合いに三人ずついます。ですからむしろ、かなり一般的な名前であると思われます。」

絶対嘘じゃが、演劇部を舐めるでない

「農商務省特許局、日本銀行国庫局、専売特許許可局、東京特許許可局、農商務省特許局、日本銀行国庫局、専売特許許可局、東京特

許許可局、農商務省特許局、日本銀行国庫局、専売特許許可局、東京特許許可局」

「まさか言えるとは思いませんでした。」

「これでも演劇部のホープと呼ばれておるからの。ではこっちからも。生麦生米生卵と三回言うのじゃ。」

「生むみ生もめ生ままも生むみ生もめ生ままも生むみ生もめ生ままも」

「……………」

「生もめだなんていやらしいです！生ままもだなんていやらしいです！」

「どっちもお主が言った事じゃろう？」

「あなたが言わせたことです。私にこんないやらしい言葉を言わせるなんてあなたはロリコンですか？」

「断じて違うぞい！」

「いいんです。小さな人間には大きな心で接してあげましょう。わたしのクラスでは、『ロリコンに優しく』が今月の目標ですから。」

「

「どんなクラスなのじゃ！？あと何度言うがワシはロリコンじゃないぞ！」

「真のロリコンは、決して自身をロリコンとは認めないようです。

何故なら彼らはあどけなき少女を既に立派な大人の女性として、認めているのですから。」

「……………お主もしかしてワシのこと嫌いかの？」

また目の前がにじんで来たのじゃ

「そんなことあるはずありません。いくら心の広い私でも嫌いな人とこんなに長くおしゃべりしたりしません。」

「八九寺。お主。」

八九寺を見ると

「見つめないでください。そんな目で見つめられると、しゃっくりします。」

「お主の体はどうなっておるのじゃ!？」

「真宵ちゃん。着いたわよ。」

前を見るともう学校についておった

「2-Fまで連れて行ってください。」

「Fクラスに？」

「はい。その掃除ロッカーに用があります。」

「どんなようなのじゃ？」

Fクラス

「ここがFクラスじゃ。」

「では少し待っていてください。」

そう言つて八九寺はロッカーの中に入つて行つた

「いったい何があるのかのう？」

「あんたのクラスでしょ？何か知らないの？」

「わからん。何もなかったはずじゃが……」

ガチャ

「あ、真宵ちゃん。いったい何が……」

「トグサじゃったか。いったい何のためにあんなことをしたのじゃ

？」

「新しいキャラ作りのためだ。」

「はあ、次にやる時はちゃんと言つてよね。」

「ああ。わかつた。」

「じゃあ放課後に。」

そう言つて姉上はAクラスに行つた

「全く。かなり傷ついたぞい……」

「設定としては人見知りで言葉遣いは丁寧だが礼儀正しい訳ではなく、かなり慇懃無礼。という設定だったんだ。」

「……………」

トグサを睨む

「……………」

潤んだ目でトグサを見つめる

「わかった。帰りになんかおごってやるからそんな目で見るな。」

「しょうがないのう。今日のところはそれで許してやるかのう。」

「秀吉騙したな。」

「先に騙したのはそっちじゃ。」

今日も楽しい一日が始まる

ワシと姉上と迷子（後書き）

八九寺真宵を出してみたら秀吉をいじめすぎました。
ご意見感想お待ちしております。

僕と八九寺とムツツリ商会（前書き）

優しい目で見てやってください。

僕と八九寺とムツツリ商会

「トグサ。あれ見て。」

優子が指差すほうを見ると、明久と美波がキスをしていた

「朝からアツいね。」

「なんか変な集団が吉井をリンチしてるんだけど…。」

「元気いいね、なんかいいことでもあったのかな？」

「なんか坂本も連れて行かれてるんだけど…。」

「どうせ翔子とキスしたとかそんな理由だろう。」

「トグサは大丈夫なの？」

「何がだ？」

「だって何度もキス」

バチバチッ

「がつ！？」

『異端者を発見。確保しました。』

『よし。連れて行け。』

『はいっ！須川会長！』

…。

『これより2-F異端審問会を開催する！』

また捕まってしまった

今現在の状況は、手足を縛られ、猿轡を噛まされ、大きな袋に詰められている

脱出は無理なので耳を澄まして周りの確認をする

「（ここはトグサを身代わりにしよう。）」

「（いや待て、あいつも被害者だ。ここはお前が行くべきだ。）」

「（どうして僕なのさ！？今ならトグサは気絶しているからばれないよ。）」

『『ファーストタッチ？』』』

「ファーストキスよりファーストタッチの方が先だなんて……八九寺真宵はいやらしい女の子になってしまいましたっ！」

『まあ、減るもんじゃないし、揉まれたら増えるともいうぞ？』

「そんな迷信、信じているのは男だけですっ！まさか！？そんな迷信を楯にとつて、あなたたちは女子の胸を揉みまくってきたのですか！？最低ですね！」

『残念がらそんな機会は一度もなかったな……』

「童貞野郎なんですな。童貞に触られるなんて……。木下さん、汚れた私でも今まで通り仲良くしてくれますか？」

『好き放題言ってくれたな。諸君！ファーストタッチがどうかいなくなるくらいに揉みしだいてやれ！』

『『はいっ！須川会長！』』』

「……お前ら、停学一週間では足りなかったか？」

『『て、鉄人！？』』』

『『教育的指導っ！……！』』』

『『ぎゃああああああああああつっ！！！！』』』

その後、吉井と美波が一緒にちやぶ台で勉強し、清水さんと異端審問会が明久を狙って、Dクラスが戦争の準備をして、美波に告白は誤解だつてことを伝えて、Dクラスが戦争の準備をやめて昼休み

「なんだ明久。弁当もらえなかったのか？」

『ご機嫌斜めでもらえなかった……。』

「まあ、諦めることじゃ。」

「トグサ、少しくれない？」

「吉井さん。今朝のこと忘れてるんですか？」

「今朝のこと？」

「わたしのことを身代わりにしたでしょう？」

「ナンノコトヤラ……。」

「わかりました。こっちにも考えがあります。」

「考え？」

「あなたには三つの選択肢があります。一つ、今のあなたの生活を玲さんに伝える。二つ、久保利光さんに「僕は君のことが好きだ。だから僕のすべてを君にあげる。」と告白してくる。三つ、一週間姫路さんの手作り弁当を食べる。さあ、選んでください。」

「心の底からごめんなさい。」

「まあ、いいでしょう。次はありませんから。」

「ところでムツツリー二はどうしたのじゃ？姿が見えんが。」

「なんか妙な情報の確認に、戻ってきたな。」

「……ただいま。」

「またなんかあったの？」

「……今朝よりさらに良くない状況になってきている。」

そう告げてムツツリー二が小型録音機の再生ボタンを押す

『あ、あのッ、土屋君ッ。明久君のセーラー服姿の写真を持っているって噂は本当ですかッ？』

『……一枚一〇〇円。二次配布は禁止。』

『二次配布は禁止ですか……。残念です……。でも、私個人で楽しむだけでも十分に。』

ブツッ

「……再生するファイルを間違えた。」

「ねえ何！？今の会話は何！？僕にとっては今の会話が十二分に良くない情報なんだけど！」

「うるさいです吉井さん。あなたのことなんてどうでもいいんです。」

「

「どうでもよくないよ！どうして僕の女装写真が秀吉の写真と同じように裏で取引されているの！？」

「待て！？それは一体どういうことじゃ！？」

「……こっちが本物。」

『駿河お姉さまの写真があるって本当ですか！？』

「…………一枚八〇〇円。二次配布は禁止。」

「構いません！ああ、お姉さま！今会いに行きますっ！」

「…………まいどあり。」

「わたしはあなたのエロ奴隷ですっ！早く私を可愛がってくださいっ！」

ブツッ

「…………再生するファイルを間違えた。」

「…………。」

「…………。」

「…………。」

「あれっ！？スルー！？今のスルー！？」

内容はBクラスがFクラスに戦争を仕掛けようとしているものだった
僕たちは明久とに真にをくつつけて清水さんを焚きつけてDクラス
と戦争することになった
そんなにうまくいくのか？

僕と八九寺とムツツリ商会（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

僕と演技と零閃（前書き）

鏡花水月さん感想ありがとうございます。
これからもがんばります。

僕と演技と零閃

明久たちは今清水さんをだますために屋上にいる

「……ねえ、アキ。」

「何、美波？」

「今更なんだけど……あ、アキにきちんとウチの気持ちを伝えておこうと思うの。」

「え、そんなの、今更言われなくても……。」

「それでも聞いて欲しいの。……こういうことは、ハッキリさせておきたいから。」

「うん。わかった。それなら聞かせて欲しい。美波の、本当の気持ち。」

ここまでは台本通り言っているが大丈夫か？

「わざわざこんなところに呼び出してごめんね、アキ……。あのね、ウチは、アキのことが……アキのことが嫌いな……！」

斬新な告白だね

「み、美波……？」

「初めて会った時からずっとアキのことが嫌い！あれから友達として傍にいるのがずっと辛かった！本当は友達でいるなんて、我慢できなかったのに！」

「美波……。」

「アキ……。」

「僕もずっと、同じ気持ちだった。」

なぜそこで台本通りの言葉を言うのか？

僕は教室でさっきの演技の反省会をしていた

「まったくお主らは、なんという失態を……。」

「だ、だって仕方ないじゃない！あんな台詞言えるわけないもの！」

しかも録音されているかもしれないのよ!？」

「そ、そうだよっ!美波にあんな可愛い台詞が言えるわけあれ?右手の感覚がなくなってきたような?」

明久の腕が青紫になっているのはおそらく錯覚だろう

「あ、それなら木下君。お手本を見せてもらえませんか?」

「んむ?別に良いが。トグサ、相手役をやってくれるかの?」

「別に良いが、どういう設定でやるんだ?」

「お主ならアドリブで大丈夫じゃろ?」

「それもそうだな。」

そう言つて秀吉と見つめあう

「秀吉、こんなところに呼び出して何の用だ?」

「トグサ。ごめんなさい、こんなところに呼び出して…。」

「別に良いさ。」

「わたしはあなたが好きだ。ずっと前から…。」

「……僕はそれほど好きじゃない。」

「…そう。ごめんなさい……。」

「それでも、そばにいてくれるかい?」

「あっ……はいっ!」

「とまあ、こんな感じか?」

「そうじゃの。」

「す、凄いわね…。」

「そ、そうですね…。私が相手じゃないのに、思わずドキドキしちゃいました…。」

「さて、手本も見たところでお前たちもう一度屋上に行ってくれ。腕組んで。」

「や、鑓君。腕を組む必要はないんじゃない?」

「これは必要なことだ。さっきの失敗を取り返すにはこれぐらいやらにといけない。」

「…わかりました。」

「次は姫路にも参加してもらおうかな。」

「はい。」

「今回はうまくいきそうだな。」

「そうじゃのう。二人とも本音を言ってるからのう。」

「二人が本音を言ったび明久の腕は大変なことになってるな。」

カメラの死角で僕と秀吉は三人を見ている

「姫路が走って行ったな。」

「明久は何をしておるんじゃ？今行ったら全部台無しになってしま
うぞ？」

「あのバカ。」

明久は（おそらく保健室へ）走って行ってしまった
また失敗か

その後、小説にしておよそ60ページほどの情報戦をなんとかB
クラスとの交渉につくことができた

「雄二がいなくなった今トグサだけが頼りだよ。」

「いや、お前たちでやれ。」

「どうしてさ！？」

「この交渉で清水さんを怒らせる事が出来るのはお前だけだ。」

「でもどうすればいいのか。」

「清水さんと二人になった時にお前にとって美波がどういう存在な
のか言えればいいだけだ。」

「僕にとって……。」

後は任せたぞ

次の日

『われわれDクラスは、Fクラスに対して宣戦布告を行う！』
成功したみたいだな

「とりあえず作戦を言う。まず少しでも点数が残っているものは渡

り廊下の…。」

「待て雄二。渡り廊下の防衛は、僕と秀吉と美波の三人だけでいい。」

「やれるのか？」

「ああ、その代わりFクラスの卓袱台を何個か借りて行くぞ。」

「わかった。いくらでも持つて行け。」

「トグサ大丈夫なの？」

開戦まであと五分

「ああ、心配するな。」

「いい加減作戦を教えてくれんかのう？」

「簡単だ今こいつが持つているこれを使う。」

そう言つて自分の召喚獣を指さす

「卓袱台を使うの？」

僕の召喚獣は今何個も重ね得た卓袱台を持つている

「これで渡り廊下を半分塞ぐ。」

「半分？」

「後は僕の召喚獣でひたすら一対一を繰り返す。」

カチッ

「さあ、行こう。」

渡り廊下

「次は私よっ！」

しゃりん！

「零閃」

相手の召喚獣の首が飛ぶ

僕の今の召喚獣は黒い着流しを着た男

宇練銀閣：因幡国下酷城城主。居合い抜きの達人。

「何がどうなってるの！？あいつの召喚獣ただ座ってるだけじゃない！？」

「落ち着いて。おそらくあれは居合い抜きよ。連続で放つことはできないはずだわ。」

「それじゃあ、一列になって行くわよ！」

「……はいっ！」「……」

「半分当たりで半分外れた。零閃は居合抜きだが、連続で放てないことはない。」

「零閃編隊 五機。」

「しゃりんしゃりんしゃりんしゃりんしゃりん！」

「五体の召喚獣の首が飛ぶ」

「こいつを倒したいのならもっと早いやつを連れてこい。こいつの零閃の最高速度は 光を超えるぜ。」

忘れ物を教室に取りに行くと美波が教室のドアの前に立っていた

「どうしたんだ、美波？」

「あつ、トグサ。」

『僕にとって美波は、ありのままの自分で話ができて、一緒に遊んでいると楽しくて、たまに見せるちょっとした仕草が可愛い、とても魅力的な女の子だよ。』

ダッ

美波が顔を赤くして駆けだした

ガラッ

「……トグサだけか？」

「張本人が今顔を赤くしていったよ。」

教室から出てきたムツツリー二にそう言う

「あつ、トグサ。美波との仲直りに協力してよ。」

「それなら大丈夫だ。むしろ以前より仲良くなれると思うぞ？」

「本当に！？トグサ、ありがとう！」

彼女の想いが伝わる日は来るのかな？

僕と演技と零閃（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

次はプールでいろいろ遊びたいと思います。

アンケート（前書き）

アンケートです。

アンケート

プールのことを書きたいと思いましたที่なかなかいいアイデアが思いつかなかったのでアンケートを取りたいと思います。

やって欲しいイベント（プール、バイト、ラブレターなど）

主人公に変装して欲しいキャラ（化物語のキャラ、刀語のキャラ、文学少女のキャラなど）

などを書いてください。

やって欲しいイベントでは「主人公に何々して欲しい。」「誰々に何々のコスプレをして欲しい。」など詳しいことまで書いてくれると嬉しいです。

主人公に変装して欲しいキャラでは「誰々の状態で誰々と絡んで欲しい。」「誰々のこの台詞を言って欲しい。」「など詳しいことまで書いてくれると嬉しいです。

すべてはできないかもしれませんができる限り書いていきたいと思っています。

アンケート（後書き）

回答してくれると嬉しいです。

僕と撫子とプール（前書き）

自動車学校や畑仕事の手伝いなどで更新できませんでした。

僕と撫子とプール

「プール？」

「ああ、今週末プール掃除する代わりに自由に使っていいと言われるてな。」

「わかった。週末は空けとくよ。」

その週末

「僕たちが最後か？」

「そうみたいね。」

校門にはすでにみんながいた

「遅いぞトグサ。」

「ごめんごめん。早く行こう。」

「それもそうだな。早速着替えるか。女子は翔子に男子は俺についできてくれ。着替えたらプールサイドに集合だ。」

雄二の言葉通りに男女にわかれて更衣室に向かう

「こらこら。トグサと秀吉は女子更衣室でしょ？」

「ワシは男じゃ！」

「なんで僕まで？」

秀吉だけならまだわかるが

「何言ってるのさ？秀吉は見てのとおり可愛いから女の子に決まってるし、トグサは神原駿河さんでもあるんだから女子でしょ？」

優子頭を抱えないでくれ、僕だって辛いんだ

「しょうがない。秀吉、教員用の更衣室で着替えるぞ。」

「むう。納得いかんのじゃ。」

「頭痛くなってきたわ…。」

優子が頭を抱えている

「優子お姉ちゃん。楽しくないの?」

「大丈夫よ。撫子ちゃん。」

「あれ?優子?」

振り向くとそこには工藤愛子がいた

「この子可愛いね。名前は?」

「ししししししししし失礼します!」

「……なんかちよつと傷つくね。」

プールサイドでみんなが遊んでいるのを見てると優子が来た

「泳がないの?」

「ああ。もう少しここで見てるよ。」

「もう少しってあんた一度もプールに入っていないじゃない。」
目をそらす

「…あんた。泳げないの?」

「ナニライツテイルンダユウコ。ボクガオヨゲナイハズナイジャナイカ。ボクガオヨゲナイノハセケンノアラナミグライダヨ?」

そんな目で僕を見ないでください

「なら泳ごうか、トグサ。」

「そうだね一緒に泳ごうか。」

雄二と明久がやけにいい笑顔で僕の腕と足を掴みながら言う

「どうして僕の腕と足を掴むんだい?まさか僕を投げるなんてs」

「それー。」「いやあああああああ。」

やばい誰か

「ちよつ。トグサ大丈夫?」

僕が必死に水を書いていると優子が泳いできてくれた

「優子!助けて!」

「わかったから落ち着きなさい。ほら、捕まって。」

「ゆ、優子!」

「ちよつ／＼／トグサ!？」

「えっ？」

僕の状態：優子の上半身にコアラのように抱きつき手に何やら肌触りのよい布を持っている

優子の状態：顔を真っ赤にして僕を引き寄せ胸部を少しでも見えないようにしている

明久・康太の状態：鼻から血が噴水のごとく流れている

雄二の状態：目を押さえてのた打ち回っている

「き、きやあああああああああああああ!!!」

この後のことを僕は話すことができない。それでも知りたい人がいたら『真っ赤な顔の優子』『呆れた顔の秀吉』『笑顔の女子』『血だらけの男子』がキーワードだ

「ちよつとおなかすいたな。」

「そうだね。何か買つて来ようか？」

明久と話していると優子がやってきた

「アタシ、シュークリーム作ってきたの。」

「お、うまそうだな。」

「ボク、シュークリーム好きなんだ。」

みんなが優子の作ってきたシュークリームに手を伸ばそうとすると

「あの実は私も作ってきたんです。ちよつと失敗して人数分できなかったんですけどワッフルが三つ。」

「第一回っ!」（雄二の声）

「最速王者決定戦っ!」（明久の声）

「女神たちの御褒美は誰の手にっ!？」（僕の声）

「「「ガチンコ、水泳対決——っ!!!!」」（僕と雄二と明久の声）

「「「イエーーーーッ!!!!」」（秀吉とムッツリーニの合いの手）

女性陣はいきなりの展開についていけないようだ

「明久、ルール説明だ！」

「オッケー！ルールはとっても簡単。ここのプールを往復して、最初にゴールした人の勝ち。それだけです。」

「よくわからないけど、誰が速いのかは興味があるわね。」

「ちよっと！トグサはさつき泳ぎを覚えただけなのよ。」

優子が異議を申し立てるが

「大丈夫だ優子。必ず勝って見せよう。」

「それじゃ、僕が判定してあげるよ。」

右から雄二、明久、ムツツリー二、秀吉、僕の順で並ぶ

「七の構え「杜若」」

みんなと違い台の横で構える

「よいい…スタート！」

「忍法「足軽」」

水の上を駆け抜ける

「「何い！？」」

取っ組み合いを始めた明久と雄二が驚きの声を上げる

「トグサ！それは反則だろ！」

「ルールは『ここのプールを往復して、最初にゴールした人の勝ち。』

『誰も『泳いで』なんて言っていないぞ。』

「くそっ！」

雄二たちが飛びこむがもう遅い

「ゴール！」

順位：一位トグサ。二位秀吉。三位ムツツリー二。四位雄二。五位

明久

「それじゃあ、僕は優子のシュークリームをもらおうかな。」

「ワシも姉上のシュークリームをもらおうかのう。」

優子のシュークリームに手を伸ばす

「あの私のワッフルも食べてください。」

姫路さんがそう言うが

「それは明久たちにやってくれ優子のシュークリームは僕たちが全

部食べちゃいそうだから。」

「はいっ!」

さらば敗者たちよ

「それじゃあ、いただきます。」

「いただくのじゃ。」

シュークリームにかぶりつく。カスタードクリームが舌に触れた瞬間、鋭い刺激が全身を駆け抜けた

「……………!!……………!?!」

「……………!!……………!?!」

「どうしたの二人とも!?!」

心配そうに顔を覗き込んでいる優子に秀吉がシュークリームをひと千切り渡す

「食べろってこと?……………しよっぱ!?!」

おそらく砂糖と塩を間違えたんだろう

「残しているよ。こんなの食べれないでしょ。」

優子の言葉を見殺して食べ続ける

「ちよっと。トグサ?」

「ごちそうさま。」

「トグサ?」

「優子。明日うちに来い。料理というものを教えてやる」

「えっ?」

僕と撫子とプール（後書き）

次回はトグサの料理教室を予定しています。
アンケートは随時受け付けています。
ご意見感想お待ちしております。

僕と女性陣と料理教室（前書き）

料理教室です。

僕と女性陣と料理教室

「皆よく来てくれたな上がってくれ。」

プールの次の日、僕は昨日のメンバーを家に呼んだ

「あたしたちにも教えてくれるってホント？」

美波が聞いてくる

「ああ、張り合う相手がいたほうがいいからな。」

「俺たちは必要ないんじゃないか？」

「お前たちには部屋の片づけと試食係をしてもらう。」

「試食係はわかるが、なんで部屋の片づけもしなきゃいけないんだ？」

「そうだよトグサ。なんで部屋の片づけまで僕たちがやらないといけないのさ？」

雄二と明久が反論するが

「昨日、プール掃除を秀吉と二人だけでやったんだ。それくらいいいだろう。」

雄二たちが納得いかない顔をしているが

「それより早く歩いろつよ。トグサ君の部屋を見てみたいな。」

「そうだな。」

ガチャ

「トグサこの荷物は？」

玄関を開けると大きな段ボールが置いてあった

「僕の知り合いがたまに本を送ってくるんだ。この前は世界中の童話が送られてきたよ。」

そう言いながら段ボールを開け、閉じた

「どうして閉じるの？」

「ちよっと、読まないジャンルだったんでね。」

「どんなジャンルなんですか？」

「男と女が愛を語り合う話かな。」

優子と姫路の眼をそらしながら質問に答える

「葉月、読んでみたいですよ！」

「だめだよ葉月ちゃん。これは君にはまだ早い。」

「え、ただのラブストーリーでしょう？」

美波が首をかしげて聞いてくる

「ちよつと、遠回しに言いすぎたかな。もう少し詳しく言うと、男と女が『激しく肉体言語で』愛を語り合う話だよ。」

「……………／／……………」

ほとんどの人が顔を真っ赤にして黙ってしまった。話し合いの結果、ムツツリー二と愛子にこの本たちを譲ることにした

トグサの部屋

「雄二たちはこの部屋の片づけを頼む。」

「見事に本だらけだね。」

「どこをどう片づければいいんだ？」

みんなが啞然としている。僕の部屋を簡単に説明すると四方が本棚に囲まれいくつかの本の塔が立ち並んでいる広めの部屋だ

「積んである本を棚にジャンル別に並べてくれ。くれぐれも慎重にやってくれよ。崩れたら、圧死するから。」

「は……。すごい本の数です。」

「それじゃあ、女子と秀吉はついてきてくれ。」

キッチン

「それじゃあ。始めます。」

「……………はい。……………」

「その前に持ち物検査をします。」

「……………はい？……………」

優子、秀吉、愛子、美波の四人は普通に料理に使う道具を持っていた
「じゃあ、次は葉月ちゃん。」

「はいです!」

特に変わったものはなかったが

「葉月ちゃん。このお菓子の山は何かな?」

「隠し味です!」

チョコ、アメ、マシユマロ、ガム、e t c . e t c .

「この場所では使わないからあ兄ちゃんたちがいる部屋に置いてきてね。」

「む。わかりました。」

「じゃあ翔子。」

何やら怪しい色の液体が

「翔子。この小瓶に入ってる液体は何かな?」

「……雄二が素直になる魔法の水。」

「これも部屋に置いてきて。」

「……………わかった。」

なんとかわかってもらえたようだ

「最後に姫路さん。」

「はいっ。」

塩酸、硝酸、硫酸、硝酸カリウム、クロロ酢酸、e t c . e t c .

翔子と葉月ちゃん以外の皆が青ざめる

「姫路さんこれらは何かな?」

「隠し味ですっ。」

「一般的にこれらは薬品と呼ばれているんだけど……。」

「大丈夫です。ちゃんと中和できます。」

「部屋に置いてきて。」

「個性的な味を出すには必要なんです。」

「置いてきて。」

「でも「置いてきて。」わかりました。」

僕にこの子を止められるんだろうか

数時間後

「できたぞ。」

カリフラワーのサラダ、ポテト入りチーズスープ、えのきとたらこのスパゲッティなど洋食を中心に何品か作ってみた

「お、うまそうだな。」

「僕もうおなかぺこぺこだよ。」

「……早く食べよう。」

「部屋も片付いたみたいだし食べるか。」

「……いただきますっ！！」「」

「おいし。」

「……いつもよりおいしくできてる。」

「葉月がこれを作ったなんて信じられないです。」

みんなが笑顔で料理をおなかに納めていく

「この、サラダとスープとスパゲッティなんて毎日食べたいくらいだよ。」

「スープは私です。」

「スパゲッティはウチよ。」

「サラダは葉月です。」

「……。」「」

「……ごちそうさまでしたっ！！」「」

その日は誰も犠牲者は出なかった

「姫路さんはやっぱり料理上手だね。もっと食べたかったよ。」

「あつ、それなら今朝作ったゼリーが…。」

「!？」

僕と女性陣と料理教室（後書き）

姫路さんはトグサの前では普通の料理になります。
ご意見感想お待ちしております。

僕と暴言と戦場ヶ原ひたぎ（前書き）

ガハラさん登場です。

僕と暴言と戦場ヶ原ひたぎ

ある日の放課後

「そういえば、トグサってどんな人にもなれるの？」

「お、それは興味あるな。」

明久たちがそんなことを言ってきた

「それは興味あるのう。」

「そうですね。明久君にもなれるんでしょうか？」

「そうね。アキが二人いるところも見てみたいわね。」

その言葉に秀吉、姫路、美波も乗ってきた

「新しいモデルが丁度欲しかった。」

ムツツリーニがカメラを持って近づいてきた

「ムツツリーニ、何かリクエストは？」

「…ドS。FクラスにはドMが多い。」

「ドSね。了解。」

明久視点

「待たせたわね。」

そこには美少女がいた

「結婚sがつ!？」

飛びつこうとした僕の口にホッチキスがねじ込まれた

「あなたのような童貞が気安く触らないでくれる？」

酷い言い草だ

「僕が童貞だって言う証拠はどこにあるのさ!？」

「あなたの相手をしてくれるのはあなたのお姉さんだけよ。それとももうお姉さんと行為に及んだのかしら。」

「すいません童貞です!」

まさか姉さんのことを出してくるなんて

「それでいいのよ。自己紹介がまだだったわね。私の名前は戦場ヶ

原ひたぎよ。」

戦場ヶ原さんか、なんか名前まで怖い

「あなたは私のことを戦場ヶ原さまと呼びなさい。」

「……センジョーガハラサマ。」

「片仮名の発音はいただけないわ。ちゃんと言いなさい。」

「戦場ヶ原ちゃん。」

目を突かれた。

「目があ、目がああ！」

「失言するからよ。」

「何その理屈!？」

まるで暴言と暴力の塊のような人だ

「ちなみに銅四十グラム、亜鉛二十五グラム、ニッケル十五グラム、照れ隠し五グラムに悪意九十七キロで、私の暴言は錬成されているわ。」

「ほとんど悪意!？」

「ちなみに照れ隠しというのは嘘よ。」

「一番抜けちゃいけない要素が抜けちゃった！」

「うるさいわねえ。いい加減にしないとあなたのニックネームを生理痛にするわよ。」

「イジメだ！」

「何よ文字通り生理現象なのだから、恥ずかしいことではないわ。」

「悪意があるよ!？」

なんて人なんだ、だが僕も負けてられない

「だったら君のニックネームをツンデレっ子にする!！」

「私が一度でもデレたことがあるかしら？」

「なら……。」

「語彙が足りないわね。」

「くそっ。」

僕では勝てないのか？

「こうなったら力づくだ！」

力では負けないはずだ

「あなたが私を襲ったら私はどんなことをしてもボーイズラブな仕返しをするわ。」

「ごめんなさい。」

「あなたのような頭が著しく悪い童貞野郎がこの私をどうにかできるなんてあなたがテストで一番を取る方がまだ可能性があるわよ。」
「それはもう不可能でいいんじゃないだろうか」

「ねえ、言葉の暴力って知ってる？」

「なら言葉の警察を呼びなさいよ。」

駄目だこの人には勝てない

「ちよつといじめすぎちゃったみたいね。」

泣きたい

「しょうがないわね、お詫びに何でもひとつ願いをかなえてあげるわ。」

「何でも？」

「「本当に何でもいいわよ。どんな願いでも一つだけかなえてあげる。世界征服でも、永遠の命でも、これから地球にやってくるサイヤ人を倒して欲しいでも。」

「君はシエンロン以上の力を持っているのか！？」

「当り前よ。でもまあ、個人的なお願いの方が私としては助かるわね。」

「うゝん。」

「なんでも言って頂戴。出来る限りのことはさせてもらうつもりだから。一週間語尾に『にゅ』とつけて会話して欲しいとか、一週間下着を着用せずに授業を受けて欲しいとか、一週間毎朝裸エプロンで起こしに来て欲しいとか、一週間浣腸ダイエットに付き合っ欲しいとか、吉井君にもいろいろ好みはあるでしょう。」

「なっ！？」

そんなことまでしてくれるのか！？　だけど姫路さんや美波からの視線が痛い

「参考までに、私の個人的なお勧めは毎朝裸エプロンで起こす、かしらね。私、早起きは得意というよりは最早習慣だし、なんならついでに、朝食を作ってあげてもいいのよ。勿論裸エプロンのままでそれを後ろから眺めるなんて、なかなか男のロマンじゃない?」

裸エプロンに朝食だと!?!これはもう決定じゃないか?いや、待つんだ吉井明久。彼女の料理が姫路さんクラスのものだったらどうする? そうだったら僕は耐えられないぞ! いや待て、裸エプロンということは『君を食べたいな。』みたいなことも可能じゃないか? いや、だけど初めての相手はやっぱり好きな人とするべきだし、彼女もそんなに簡単に体を許すわけがない。ならばどうする? 『姫路さんを僕のものに。』これなら好きな人との行為も可能じゃないか? いや、ここには雄二とムツツリー二がいる。叶ったところで僕の死は免れない。くっどうすればいいんだ!!!

「決まらないみたいね。それじゃあ、あなたに幸せな気分を味あわせてあげましょう。」

「幸せな気分?」

彼女は指で僕を指すと

「I love you .」

きれいな発音でそう言った

「お父さん、お母さん僕を生んでくれてありがとうございます。心がとても温かい」

「まあ、私には彼氏がいるのだけれど。」

あれ、おかしいな? 目の前がかすむ。

「彼は『全部好きだ。好きじゃないところはない。』って言うてくれたわ。」

なんだこれは独り身の僕を口撃して孤独死にさせるつもりか?

「まあ、冗談はこのくらいにしといて。」

「冗談!?!どこから!?!」

「『待たせたわね。』からよ。」

「最初から全部!?!」

「いいえ。『うるさいわねえ。いい加減にしないとあなたのニツクネームを生理痛にするわよ。』は本当だわ。」

「そこは冗談にしろおおおおおおおおお！！」

明久視点終了

「トグサ、一緒に帰りましょ。」

「そうだな。」

「吉井君は何をしているの？」

教室の隅での字を大量生産しながら「…生理痛。」とつぶやいている

「ちょっとやりすぎちゃった。」

僕と暴言と戦場ヶ原ひたぎ（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

僕と図書館と文学少女（前書き）

文学少女が登場します。

僕と図書館と文学少女

「本当に良かったの？買い物に付き合ってもらって。隣を歩く優子に聞く」

「いいの、いいの。家にいてもやることなかったし。」

今日は日曜日、朝優子から電話があつて

『何か予定ある？』

と聞かれて、買い物に行くと答えたら

『アタシも行く！』

と言われて一緒に出かけることになった

「で、今日はどこ行くの？」

「それは…。」

本屋

「この人の最新作欲しかったんだよ。」

「（あつ、新しいBL本。今ならトグサも見えないし…。）」

Book store

「よかった。さっきの店になかったからこの店にもないと思ったよ。」

「（ここはあまり置いてないわね…。）」

古本屋

「これは！？あの作家の初版本！？まさかこんなところにあつたとは！」

「（これは！？あの作家の幻の一冊！？まさかこんな所にあつたなんて！）」

古書店

「この本欲しかったんです！取っておいてくれたんですか！？ありがとうございます！」

「（こんな店には流石に置いてないか……）」

喫茶店

「いや。こんなに欲しかった本が手に入るなんて今日はついでな。」

「そっそうね。」

優子はそわそわしている。おおかた買ったBL本を早く読みたいんだらう

「それにしても気になるな。『代表と僕の学園生活』伝説の木の下で君を待つ』の続き。」

「そっうね！早く家に帰って雄一が吉田を木の下に呼び出すところを？……。」

ギギギつ、と壊れた機械のような音を出してこっちを見る優子

「しししし知ってたの？アタシがBL本読んでいるの？」

「知っているよ。」

笑顔でそう答えると頭を抱えてぶつぶつ何か言い始めた

「こんなことを知られたらもうトグサとやっていけないし、トグサもこんなアタシなんかと付き合いたくないはず。まさか最近一緒に帰ってくれなかったのもあたしに愛想を尽かして！？……………」。（ブツブツ）

「優子。」

「は、ハイ！」

「僕は別に優子と別れる気なんてないよ。」

「え？」

「ロザリオ・モラレス曰く『私は私。そのままを受け止めてくれ

るか、さもなければ放つといて。』どんな君だろうと受け止めて見せるさ。」

「はあ〜〜。」

息を吐きながら優子は机に突っ伏した

「必死で隠してたアタシって馬鹿みたい。」

「まあ、欲を言うなら他のジャンルももっと読んで欲しいかな？」

「なら、面白い本紹介しなさいよ。」

「任せて。」

図書館

「やっぱ、お勧めはポール・ギャリコかな。」

「『スノーグース』だっけ？」

「そう、『スノーグース』の作者。今回薦めるのはこの」

「『ジエニイ』」

「『えっ？』」

「『あっ！？』」

「トグサ君！？」

「遠子さん！？」

そこには文学少女がいた

「最近見ないと思ったら彼女ができたのね。」

聖条学園の制服を着ている長い三つ編みの女性は天野遠子。物語を
食べちゃっぐらい深く愛している

自称文学少女だ

「そっちも彼氏ができたんですか？」

隣の男の子を見て言うと思える見るうちに真っ赤になった

「ちつ「違います。僕は文芸部の後輩の井上心葉です。」…。」

「井上君か。僕は鑢トグサ。彼女は「木下優子です。」」

「わたしは天野遠子。御覧の通り文学少女よ。」

「相変わらずですね遠子さん。」

遠子さんの相変わらざるの自己紹介に笑うと井上君が聞いてきた

「遠子先輩とどういう関係なんですか？」

「本好き仲間で、元おやつ係。」

「えっ!？」

「どういうこと？」

優子の言葉に遠子さんが答える

「わたしはね、普通の食べ物食べても味を感じないの、その代わり物語を食べると味を感じることが出来るの。つまり私のご飯は本
つてわけよ。」

「ちよつと、遠子さん!？」

井上君が慌てているが

「大丈夫よ。コノハ君。トグサ君もびっくり人間だから。」

顔を二、三度擦って井上君の顔にする

「なっ!？」

「そう言うこと。」

顔を擦って元に戻す

「……これは夢ですか？」

「現実よ。」

「バイロン曰く『事実は小説より奇なり。』」

「これくらいじゃ驚かない自分が怖いわ。」

井上君が三十分頭を抱えていた

「取り乱してすいません。」

「まあこれが普通の反応よね。」

井上君の言葉に優子が答える

「文月学園の人達が若干人間離れしてるからな。」

「文月学園の人なんですか？」

「そうだよ。」

「試験召喚ってどんな感じなんですか？」

「見てみたい？」

「見れるの！？」

「やっぱり試験召喚は有名なようだ」

「それじゃ見せてあげるよ。『ファイレ』」

腕輪を発動させる

「何をしたの？」

「この腕輪は教師と同じように召喚フィールドを発動させることができるんだよ。教師の手伝いばかりしてたら教員代行者とか言う役職になつてね。試験召喚。優子も召喚しなよ。」

「そうね、試験召喚。」

机の上に二人の召喚獣が召喚される

「「おお。」」

「僕の方には触れるから。」

「この腕輪は何？」

僕の召喚獣を触りながら遠子さんが言う

「特定の点数を取ると特殊能力をもらえるんだよ。」

「トグサさんはどんな能力なんですか？」

「僕のは十三人の人物に変身できるんだよ。」

「やってみて。」

遠子さんが瞳を輝かせながら言う

「それじゃあ、十三人の剣士。賊刀「鎧」」

僕の召喚獣が鎧武者になる

「「おお。」」

それからしばらく学校のことや本のことを話した

「それじゃあ、また。」

「また、会いましょう。」

「召喚獣見せてくれてありがとうございました。」

「トグサ君。今度会った時には優子ちゃんとの二人の愛のレポートを提出よ！」

「えっ！？（／＼／＼）」

「井上君と遠子さんの文芸部のレポートを提出してくれたらいいですよ。」

「だそうよ、コノハ君。」

「どうせ僕が書いたレポートも食べちゃうんでしょ？」

「うっ。」

「それじゃあ、帰ってレポートを書くか。」

「がんばってね。」

「何言ってるんだ？優子も書くんだぞ。二人の愛のレポートは二人で書かないと。」

「ええっ！？」

「とびつきり甘い奴をな。」

「もっ。」

僕と図書館と文学少女（後書き）

遠子さんたちはこれから時々出すかもしれません。
ご意見ご感想お待ちしております。

僕と明久と玲さん（前書き）

玲さんが登場します。今回は短いです。

僕と明久と玲さん

ある日曜の昼

「さてファミレスにでも行こうか。」

今日は優子の買い物に付き合っていた

「そうね……………って何あれ？」

そういう優子の視線の先には大きな旅行カバンを持ったショートカツトの女性

「あの人は…。」

「知ってるの？」

「トグサ君じゃないですか。」

優子に話そうとしたら向こうからやってきた

「久しぶりですね、玲さん。」

「こ、こんにちは。」

「ほんとに久しぶりですね。彼女は？」

「あ、アタシは木下優子です。」

「私は吉井玲です。」

名前を聞いてわかるように明久の姉です。頭はまったく違いますが

「で、二人はどういう関係ですか？」

「え、えっと…。」

「付き合ってます。」

口籠る優子の代わりに答える

「トグサ君。わかってると思いますけど…。」

「ちゃんと健全なお付き合いをしていますよ。」

「まあ、トグサ君なら大丈夫ですね。それでは出来の悪い弟のところに
行かないといけませんので。」

「さようなら。」

玲さんを二人で見送る

「……………」

「……………」
「……………」
「……………」

「…なんなのあの人。」

「吉井玲さん。明久と違って頭はいいんだが常識がちょっとな…。」

「ちよつとどころじゃないでしょう。」

玲さんはなぜかバスローブ姿でした

吉井家

「よっ！ほっ！」

P i P i P i P i

「ん？誰からだろ？」

M e s s a g e F r o m トグサ

『今、玲さんと会った。』

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「何い！…？どうしよどうしよどうしよどうしよどうしよ…
うしよどうしよ！…？そうだ、雄二のところに！」

ピンポン

吉井明久は逃げようとした。しかし回り込まれた
そうだとグサに連絡を

トグサ

P i P i P i P i

パカッ

M a s s a g e F r o m 吉井明久

『他酔け手。』

「……………」

カチカチカチカチ
パタン

吉井明久

P i P i P i P i

トグサからか!?

M a s s a g e F r o m トグサ

『他酔け手 助けて。いくら焦ってるからってこれはないだろ。』

この野郎!こんな時にふざけやがって…ん?まだある

『P・S・僕が行っても何もできない。本当にごめんな。無能な僕を許してくれ。』

心やさしい友の言葉に涙が出てきた。トグサ、僕頑張るよ!

P i P i P i P i

ん?

M a s s a g e F r o m トグサ

『玲さんはなぜかバスローブ姿だった。あまりにも堂々としていたので何も言えなかった。気をつけろ、おそらく常識の方は何も変わってない!』

早くも挫けそうだ

僕と明久と玲さん（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

僕と皆と勉強に目覚めた明久（前書き）

今回は委員長ちゃんになってみました。会話は少ないですが。

僕と皆と勉強に目覚めた明久

「この化合物の生成に必要な触媒は……。」

カリカリカリカリ

「この触媒を用いることで生成エネルギーは……。」

カリカリカリカリ

「……。」

カリカリ

「……。」

「……。」

「吉井。保健室に行つてきなさい。」

「僕が真面目に勉強していたらおかしいですかっ!？」

「だめだよ吉井君。体は大事にしなくちゃ。」

「羽川さんもなんでそんなこと言うの!？」

「私が保健室に連れてつてあげるから。」

『『殺せえつ!!!』』

このやり取りを、午前中の四つの授業で七回繰り返した

「まったく、みんな失礼だなあ……。」

明久がそんなことを呟いていたが普段の行動からみても正しい判断だったと思う。まあ、姫路たち歩避けているのを見ると、たぶん玲さんから見だろう。玲さんなら異性と手をつないただけで不純異性交遊と言いかねない。しかし僕の場合どうなるんだろ?今の姿(眼鏡に三つ編みの羽川 翼)は完全に女子だけど玲さんには何回か見せたことあるし。あの人なら不純同性交遊なら許しそうだし

「随分と上手なお弁当ですね。明久君の周りでこんなに上手にお弁当を作る人って言うと。」

「トグサ、坂本、土屋の誰かよね。」

美波が僕の胸をまるで親の敵のように睨みつけながら言う。なぜだろう、震えが止まらない。一応誤解を解いとくか

「島田さん。姫路さん。私は木下さんのところに行くから。」

「今日はお弁当ないんですか？」

姫路が何も持つてないことに聞いてくる。美波は相変わらず睨んでいるが

「ええ。今日は木下さんが作ってくれたみたいだから。」

料理教室をやってから優子は週一のペースでお弁当を作ってくれるようになった。腕前の方も見違えるくらいにうまくなっている

「それなら、坂本君か土屋君のどっちかですね。」

いい加減美波の視線がつかなくなってきたのでとっておきの技を使うことにする。美波の耳元で

「島田さん。ごによごによごによ…。」

「!?!」

「そのあとに、ごによごによごによ…。」

「!?!?!」

「仕上げて、ごによごによごによ…。」

「それ、本当!?!」

「ええ、私はこれでここまでになったわ。」

そう言うとき美波は僕の手を取り涙を流しながら

「ありがとう! あなたのことが誤解してたわ。」

そう言うてきたがちよつと何かをしたぐらいでこの絶壁はどうにもなりそうになかったので一応保険をかけておく

「だけどこの方法は相性があるみたいだから効果がなかったらまた私に聞いてね。」

「ありがとう。本当に何でも知っているのね。」

「何でもは知らないわよ知っていることだけ。」

そう言うてAクラスに向かうと翔子に会った

「どうしたんですか? 霧島さん。」

「雄二にこれを返しに来た。」

その手には男子の制服のズボンが握られている。どうりで雄二の恰好が制服＋短パンだったわけだ

「坂本君なら教s「今朝も坂本に『今夜は帰りたくない』なんてメルを送っていたわよね。」って消えた!？」

どうやら雄二のズボンが返されることはないみたいだ

放課後

「トグサ、雄二、ちよつといい？」

帰り支度を終え優子を待っている。と明久に話しかけられた。ちなみに優子に「ほんとに自信なくすから。」と言われ元の姿に戻ってる「ん、どうした明久。」

雄二が答える

「今日ただけだし、雄二の家に泊めてくれない？それで、期末テストの出題範囲の勉強を教えて欲しいんだ。」

ザワツ

教室にざわめきが広がった

『おい…聞いたか、今の…?』

『『まさかあの二人が期末テストの存在を知っているなんて…。』』
いくらなんでもさつき雄二がHRで話したんだ。知らないわけないだろ

「勉強を教えて欲しいだろだ?」

「うん。」

「やれやれ。おまえはまだ七の段が覚えられないのか。」

「いや、違うぞ雄二。明久は分数の割り算に躓いているところなんだ。」

全く雄二ときたら明久を過小評価しすぎだぞ

「待って！僕は九九の暗唱も分数の割り算もできるからねってトグサ！？どうしてそんな驚いてるの！？」

「ああそうか。三角形の面積の求め方だったか。」

「底辺×高さ÷2 三角形の面積！いい加減僕を馬鹿扱いするのはやめなさい！」

「よしよし、良くできたぞ明久。」

「後は最後に2で割ることを覚えたら三角形の面積が出せるようになるからな？」

「………。」

「さあどうする明久？」

「ふう、やれやれ二人は人の揚げ足を取ることにに関してだけは天才だね。」

「その返しは流石に予想外だ！」

「あつちは何やってるの？」

優子が明久たちの方を見ながら近づいてくる。家に改装業者が来るとか鍵を落としたとか家が火事になったとか皆に言い訳している

「どうせ玲さんのことにことを知られたくないんだろ。」

「ああ……。」

「まったく。しょうがないな。」

明久に近づく

「明久、みんなに本当のことと言って協力してもらった方がいいんじゃないか？」

「なんだトグサはこいつがおかしい理由を知っているのか？」

「心当たりがあるだけだよ。」

「トグサの言うとうりかな白状するよ。実は姉さんが家に帰って来てて。」

それだけじゃわかんないだろ

「それだけなんですか？」

しょうがないな

「その明久の姉が昨日街をバスローブ姿で歩いてた。」

「ちよつと、トグサ！？何言ってるのさせっかく隠そうとしてたのに！」

「……。」「……」

諦める。あれは隠しきれない。雄二が明久の肩を持ち優しい目で「お前も苦労してるんだな。」と言っていた。その後、勉強みんなでやるということと明久の姉を見たいということで明久の家に行くことになった

数日後、美波の胸はほんの少し成長したらしい

僕と皆と勉強に目覚めた明久（後書き）

次回は本格的に玲さんが出ます。

僕と皆と家庭訪問（前書き）

いろいろと書きたいものがありますが時間がありません。

僕と皆と家庭訪問

なんやかんやで明久宅に到着

「……………」

「姉さんの馬鹿ああああああああつ！！！」

ダバダバダバ

リビングの扉を開くと室内に干された女性用の下着、バスローブ、ナース服。ムツツリー二は早くも限界らしい、鼻を押さえプルプルしている。ナース服が干されているということは昨日着たということなんだろうか？どちらかというと明久のサイズに見えるのだが深く考えないようにしよう

「落ち着いたか明久？」

「何とか。」

あの後明久は眼にもとまらない速さで洗濯物を取り込みしばらく部屋の隅でブツブツ言っていた

「それじゃあ、作戦会議を始める。」

「作戦会議って大げさね。」

「僕たちのすべきことは二つ。一つは明久の学力アップ、これはまあそんなに意識しなくても平気だろ。もう一つは不純異性交遊のこまかし。」

「あのう、明久君は不純異性交遊なんてしてませんと思いますけど。」

「姫路が意見を言うが残念ながらそんなにあの人は甘くない」

「姉さんは異性と手をつなぐだけでも不純異性交遊とみなします。」

「……………」

「そういうことでみんなこの二つに気をつけてくれ、以上！」

「……………了解。」

カリカリカリカリ

ガチャツ

「姉さんが買い物に行つてゐる間に歸つて来ていたんですね、アキ君。お客さんも来ているようですね。」

(((((来た!) (((((

「ようこそいらつしゃいました。私は吉井玲といいます。皆さん出
来の悪い弟と仲良くしてくれて、ありがとうございます。」

「お邪魔してます。」

「俺は坂本雄二。明久のクラスメイトです。」

「……土屋康太、です。」

「はじめまして。雄二君に康太君。それと昨日もあいましたね。トグサ君と優子さん。」

ここまでなら普通の姉だがここからが問題だ。玲さんは「うちの馬鹿で不細工で解消なしの弟に女友達ができるはずない。」と言い切り残りの三人も「男の子ですよね？」と言った。まあ秀吉はあつてゐるんだが。明久は不純異性交遊の現行犯として減点された。誘つたのは僕だと言つたら減点は減つた。少しは感謝して欲しいものだ。その後玲さんに夕飯を誘われみんなでいただくことになった

秀吉を抜いた男性陣で料理を作ることになった。玲さんが買ってきた材料が明らかにパエリアの材料だったので料理はパエリアを作ることにした。なぜか一家庭分にしてもまだあまるほどだった。みんな料理に不安はないので女子の話聞いてみる

『よければアルバムでも見ますか？アキ君の小さなころの写真です
けど。』

そんなこんなで時間が過ぎて

「皆、待たせたな。」

「ありがとうございます。お客様なのにアキ君の手伝いまでしていただきて。」

雄二たちに料理を並べるのは任せて

「優子。」

「な、何。（／／／）」

「見たのか？」

「べ、別に何も。（／／／）」

「見たんだな？」

「ごめんなさい……。」

「とりあえず写真を出せ。」

「もらっちゃだめ？」

「だめだ。」

しぶしぶと渡す優子。見てみるとかなりきわどい写真だった。いつの間に取られたんだ？ 玲さんからも没収しないと。そう思って玲さんの方を見ると

「姉さんはアキ君のことを愛しています。……………一人の異性として。」

聞かなかったことにしよう

パエリアは美味しく頂きました

その後勉強会を行った。玲さんの授業はわかりやすかった

僕と皆と家庭訪問（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

僕と火憐と齒磨き（前書き）

長い間更新できなくてすいません。

麻帆良に来た召喚士を中心に更新しますので不定期になると思いますがなるべく早く更新したいと思います。

僕と火憐と齒磨き

今日は雄二の家で勉強会をすることになったのだが……

ぶちぶちぶちぶちぶちぶちぶちぶちぶちぶち
ぶちぶちぶちぶちぶちぶちぶちぶちぶちぶち
ぶちぶちぶちぶちぶちぶちぶちぶちぶちぶち
ぶちぶちぶちぶちぶちぶちぶちぶちぶちぶち
ぶちぶちぶちぶちぶちぶちぶちぶちぶちぶち

今には一心不乱にプチプチを漬している女の人の姿があつた。

「ゆ、雄二？今の、山ほどあるぶちブチを潰していた人って」

「さ、坂本の母親なの？　なんだか、随分とすごい量を潰していたわよね」

「う、うむ。あれほどの量。費やした時間は1/2時間ではあるまい」

「……すごい集中力」

「坂本君のお母さんはそういうお仕事をしているんでしょうか？」

「かえねや^{とひ}じ人な^{かいゆ}快愉かなかな。つくつくつく」

「そのしゃべり方やめなさい。めんどくさいわ」

「かるめやしたつなくさくどんめろそろそ、あま？ かのない嫌らきがとこのれおは前えまお。かえねやじうまちつなくし哀ながらたれわ言いとこなんそ。は前えまおなう言いとこいどひ」

真庭白鷺の逆さ喋りをやってみたが結構できるものだな。ほとんどの奴は意味がわかってないようだけど。

「おそらく、精神に疾患のある患者が何らかの手段でこの家に侵入したに違いない。なにせ、俺のおふくろは温泉旅行に行っているはずだからな」

「あら？もうこんな時間。さつき雄二を送り出したと思ったのに。」

「続きはお昼を食べてからにしましょう」

「おふくろっ！何やってんだ！？」

「長くなりそうだから今のうちに着替えるかな。」

「雄二。トイレ借りるぞ」

さて誰になろうかな。

「で、結局美波さんの家でやることになったのか」

主に雄二の精神のためと一人で家にいる葉月ちゃんのために美波の家で勉強することになった。

「そうじゃが：なぜ逆立ちで塀の上を移動しているのじゃ？」

「そりゃ腕を鍛えるために決まってるっつーの」

今の僕の姿はファイヤーシスターズのでっかい方。ポニーテールでジャージ姿の自称正義の味方。阿良々木 火憐。その姿で普通に歩くことができるか？いやできない。

「ゲーセンで逆立ちしてダンレボしてる奴がいたら、それは間違いなくあたしだぜ」

「それはそうじゃろ」

「で、あたしの近くに『プラチナむかつく』って言ってる奴がいたら、それは間違いなくあたしの妹だ」

「そうなのかの」

「で、その妹を押し倒して足で胸をぶよぶよしてる奴がいたら、それは間違いなくあたしの兄ちゃんだ」

「何をやっとするんじゃ！？お主の兄妹は！？」

「ちなみにあたしは病気で寝込んでるときに初チューを奪われた」

「お主の兄上はかなり危ないぞ！？」

「まあ、その後、殴って、蹴って、投げて、絞めたけどな」

「お主もかなり危ないぞ！？」

「ただいまー。葉月、いる？」
以下略。

帰り道

えっ？かなり抜けてるって？そりやそうだろ、なにもなかったんだから。強いて言うなら、葉月ちゃんとはしゃぎすぎて疲れた。なんだか頭も熱いし、目の前がかすむ。風邪だな。え？困い火蜂？あるわけないだろそんなの。風邪だよ風邪。それが違うなら知恵熱だ。新しいキヤラは頭を使うんだよ。

というわけで秀吉とムツツリー二の肩を借りて家に向かってます。優子は後ろで心配そうに見守っています。

しかし、なんか嫌な予感がするんだよなあ。

「よーよー、嬢ちゃん。調子悪そうだな？俺達が介抱してやるうかな？」

「そこのガキ。あとは俺達で引き受けるからさっさと帰んな」

「じゃあ、さっそくホテルにでも行くかあ？」

嫌な予感は嫌な現実を引き寄せるものか、誰の言葉か忘れたけどそのとおりだな。まあ、さっさとぶっ飛ばすか。

一歩前に進んで構えを取る。

「なんだ嬢ちゃん。やるのか？」

「待つんじや今の状態じゃ無理じゃ」

秀吉が止めに入るが…

「あたしの状態？ ああ、確かに通常じゃない。

……頭はぼやーっとしているし。身体は火照るように熱い、服が今にも燃え上がりそうだ。あちこちがだるくて一歩踏み出すだけで倒れそう。眼球から水分が飛んでいるのか、敵の姿もまともに見えやしない。次に瞬きしたら、もう二度と目を開けないかもしれねーな」

普通の人間にとってこの状態で戦うなんて言語道断だろう。だが僕は普通じゃない。

そして今の僕は阿良々木 火憐だ。彼女にとってこの状態は…

「つまり、ベストコンディションだ」

火憐得意の空手…チョーク・スリーパーXで倒したかったが二段から投げ技がある流派を扱う道場がなかったのだから仕方ない。僕が使える剣法を使うしかない。

「虚刀流『牡丹』昇華技『白王獅子』」

回る廻るまわるマワル。360°。720°。1080°。1440°。1800°。速く早くはやくハヤク。

慣性の法則と遠心力。その力を打ち出す！

ドゴッ！「がつ！？」

ドゴッ！「ゴホっ！？」

ドゴッ！「ヒデブっ！？」

バタッ！

あ、やばい意識が遠くなっていく。

木下家

「ひ……ひうぐ、ぐ、ぐうっ！？ひ、ひう……はう、はう、はう。

う……ぐ、はあ、はあ。あふっ……ふ、うっつ。う……うんっ」

「……」

「う、ううっつ……歯磨き！？」

「「歯磨き！？」」

目を開けると優子と秀吉が赤い顔で僕を覗いていた。

「どうしたんだ二人とも。赤い顔して？」

「別に何でもないわよ！ただ、どんな夢を見てたのかなって」

「ただ、歯磨きしてもらっただけの夢だったけど？なんならしてあげ

ようか？」

「えっ！？」

優子の腕を掴み優子の部屋で待たせ着替えてから優子の歯磨きを持って部屋に戻る。

「さあ、始めよう」

「いつてしまったのう」

それにしても歯磨きであんな声を出すものかのう？

「…ちよつだめっトグサ！」

この声は姉上の声！？

「うんっ！？……ひ……ひうぐ、ぐ、ぐうっ！？ひ、ひう……はう、はう、はう。う……ぐ、はあ、はあ。あふっ……ふ、ううっ。う……うんっ」

本当に歯磨きをしておるのかの！？

「いいよお…トグサあ…」

さすがにいかんじゃろ！？

ガチャ！

「そこまでじゃ！トグ…サ？」

そこではトグサが歯を磨いたりしながら姉上を慈愛顔でベットに押し倒している。姉上はうつとり顔でベットに押し倒されてる。本当に歯磨きしてる！？

「なんだ？秀吉もして欲しいのか？」

その夜、大事を取って木下家に泊まることになったのだが…。

「じゃあ、次はワシじゃな」

「ああ」

まあ、その、なんだ…今まで以上に木下姉弟と仲良くなりました。

僕と火憐と齒磨き（後書き）

感想待ってます。

僕と文学少女と勉強会（前書き）

遠子さんたちが出ます。

僕と文学少女と勉強会

「これより異端審問会を始める！」

「うおおおおお！」「うおおおおお！」

「捕まってるかあ————！！！」

「逃がさん！！！」

「くっ！？ならば、奥義！神速変化・八九寺真宵！」

「「「「「幼女キタ――――」

-----! ! ! ! ! ! ! ! ! !

「ぎゃ ああああああああああああああああああああ
あ! ! !」

スキル・行変えリセット。

なにも起きてないよ。

「どうしたんだ、明久」

「あ、トグサ。実は今日の放課後、雄二と姫路さんが来れなくなっちゃって。さすがにトグサ一人で僕たちを教えるのは無理だし。週末は霧島さんの家で泊まり込みですることになったんだけど」

確かに一人じゃ無理だな。あ、そうだ

「……………もし、トグサだけだと実は頼みたいことがあつて」

⌞
.....
⌟

「確か成績良かったよね？遠子さんと一緒に僕の友達に勉強を教え
て欲しいんだ」

⌋
⋮
⌋

「友達を連れて行っていいかって？当たり前じゃないか無理言つて

るのはこっちなんだから」

『…………』

「じゃあ、待ち合わせは図書館でそこから僕の家ということですね、ありがと、それじゃ放課後に」

「助っ人呼んだから今日は僕の家で勉強しようか」

放課後

「トグサの家で勉強するんじゃないの？」

「助っ人呼んだって言ったろ？彼女らを案内しないと隣で話しかけてくる明久に答える。」

『トグサさ〜ん』

前を見ると井上君と遠子さん、それに茶髪の女の子がいた。

鑓家

「じゃあ、まずは自己紹介からしようか。こちらは聖条学園の」

「井上心葉です」

「琴吹 ななせです」

「そして、わたしが天野遠子。御覧の通り文学少女よ」

相変わらずだなと思いながら僕は自己紹介を始める。

「僕は文月学園の、鑓十種」

「木下優子です」

「木下秀吉じゃ。一応言っておくがワシは男じゃからな」

「吉井明久です」

「島田美波です」

「…土屋康太」

「よろしくね。国語と英語は私にドーンと任せなさい！…それにしても」

突然立ち上がったかと思うと本棚に向かい

「ギャリコにディケンス、デュマにスタンダール。こっちはチェ

ーホフにシェイクスピア、オルコットにモンゴメリ。ファージョン、リンドグレン、マクララン、カートランドにジョーダン。ああ、西鶴に漱石に鷗外、宮沢賢治まで！ここは天国？」

今にもよだれをたらしそうな顔でうつとりと本の背表紙をなぞっていく。

「終わったら好きなだけ読んでいいですよ、遠子さん。早速勉強会を始めましょう」

「それじゃあ、そろそろ休憩しましょうか」

そう言くと遠子さんは早速本を読みだし、遠子さんに古典を教わっていた秀吉と美波は机に突っ伏した。琴吹さんと優子は気があつたらしく互いのことを話し始め、井上君は頭から煙を出している明久とムッツリー二を心配している。さて、そろそろ焼けたころかな？台所に向かうと優子がついてきた。

「どこに行くの？」

「さっき、クッキーを焼いたんだ。それを出そうと思ってね」

「えっでも遠子さんは…」

「大丈夫だよ。だてにおやつ係はやってないよ」

「どうぞ、トグサ特製一言クッキーです」

僕が焼いたクッキーには英語で様々な台詞が書かれている。これなら遠子さんも楽しめるはずだ。

「やったー。トグサのおやつ！」

「明久たちはちゃんと訳してから食べるよ」

「鬼ー！ー！」

文句を言うが無視する。

「『good bye my love』『さよなら、愛しい人』スノーグースのラヤダーの台詞ね。ん、美味しい〜〜〜〜」

遠子さんが早速英文を訳して頬張る。

「『little snowflake・come home t

o me now.」『小さな雪のひとひら。さあ、ようこそお帰り』雪のひとひらの最後の一文ね」

優子もクッキーをつまみ訳してからかじる。

「Merry Christmas the uncle」『クリスマスおめでとう、伯父さん』これはクリスマスカールかな？」井上君も訳しながらかじる。

「However, it might be what on earth true fortunately.」『けれども本当のさいわいは一体何だろう』銀河鉄道の夜じゃな」

そう言いながら秀吉もかじる。
他のみんなも次々手を伸ばすがFクラスの人達はあまり食べられないようだ。

勉強会も終わりみんな自分の家に向かったが…

「はあ〜。美味しそう…」

「「食べないでくださいよ遠子さん（先輩）」」

「声そろえて言わなくてもわかってるわよ」

まったく…そうだ。

「遠子さん。僕と優子の愛のレポートがあるんですが…」

「ちようだい！」

「これは井上君に預けます。あまり迷惑をかけないようにしてくださいね」

「う〜。わかったわ。すぐ帰りましょう、井上君！」

「当分の間は渡しませんよ。それじゃあ、また機会があつたら」

「ああ、またな遠子さん。井上君」

おまけ

二人の帰り道

「お願い心葉くん。ちょっとだけでいいから読まして」

「だめです。どーせ読んだら、すぐ食べちゃうんですから…ん？これは…遠子先輩これならいいですよ」

レポートのほかにもう一枚あったのでそれを遠子さんに渡す。

「やった！ありがとうございます。いただきます？」

「どうしたんですか遠子先輩？」

「数字がいつぱい…」

タイトルを見ると『数学少女』と書いてあった。

「いいわ、トグサ君。これは挑戦ね。物語ならたとえどんなものでも味わい尽くしてあげるわ！」

次の日

「心葉くん。ここを訳して」

「そこは訳すところじゃなくて解くところです。その物語を読み終わるまでレポートはお預けです」

「そんな~~~~~~~~~」

僕と文学少女と勉強会（後書き）

感想待ってます。

僕と秀吉とお風呂（前書き）

あとがきにアンケートがあります。

僕と秀吉とお風呂

週末、霧島家で勉強会をすることになったんだが…。

「トグサ。どうしたんだお前…」

勉強部屋の隅で布団を敷いてうつぶせに寝てればその言葉が出るのは当然だろう。

「ん…坂本先輩か？ああ…こんな不細工な格好で失礼した。坂本先輩の前なのに、恥ずかしい」

「その姿の時はもつと明るかったと思ったんだが…」

「ああ…そんな先輩方の期待に応えられるよう裸で勉強会の準備をしてたんだが…」

「待て、なぜ裸が出てくるのかが分からない」

「神童とも呼ばれた坂本先輩らしくないな。私は明るいエロを追及するものだ。部屋の中でまで服を着てるわけにはいかないだろう？」

「いや、お前のこだわりは知らんが…」

「話がそれだが、準備している最中霧島先輩から勉強会のことで連絡を受けてな電話で話していたんだ」

「それで？」

「すっかり部屋のドアを閉め忘れていて……優子先輩が廊下を通り過ぎて行った…」

「ああ…」

「優子先輩がものすごく悲しそうな目で見て、無言で、ドアを静かに閉めて通り去ってしまった…」

「そりゃあ、裸で電話しているところを見たらなあ…」

「もうおしまいだ。私のことを雌豚と罵り、暴力を加えながら罵声を与えてくれるならともかくあんな目で見られたらもう私は立ち直れない」

「まあ、トグサは根が真面目だからな、恋人とは言え裸を見られることに抵抗があったんだな」

「それは聞き捨てならないな坂本先輩。それでは私が普通の人みたいじゃないか」

「そりやそうだろ？明久の姉なんかバスローブで外を歩いてたんだぞ？それに比べたら家の中、それも部屋の中で裸になるなんて普通じゃないか」

「がっ！？…………フロイトの後継者を自任するこの私が普通だと……！？」

「だってなあ…家の中でだらしない恰好をしてそれを人に見られてショックを受けた。実に普通の反応じゃないか」

「ちょ…………ちよつと待ってくれ！そんなこと言わないでくれ！坂本先輩にそんなこと言われたら私もうおしまいだ！脱ぐ！今すぐ脱ぐから！」

「いやいやいやいや、俺達が悪かった。ムツツリー二にもあまり恥ずかしい恰好の写真は取らないよう言っておく」

「か、かくなる上は行為を持って身の潔白を示すしかないっ！」
雄二を布団の上に押し倒す。

「坂本先輩、お覚悟！」

「覚悟って！」

「よいではないか、生娘でもあるまいし！」

「そりや男だから生娘じゃねえよ！」

「大丈夫だ、痛いのは最初だけだ！すぐに気持ち良くなる！」

「きゃーっ！」

「ふふ、坂本先輩も中々いい身体をしているではないか私好みの筋肉だ！実に触り心地がよい！」

「きゃーっ！きゃーっ！きゃーっ！」

「こらっ！暴れるな！パンツが脱がせにくいだろっが！」

「ぎゃああああああああああっ！」

閑話休題

正気に戻りいつも通り勉強会を行い今は夕飯を食べている。それにしてもうまいなあとでレシピを教えてもらおう。

「……雄二」

「なんだ翔子？」

「……勉強の進み具合はどう？」

「まったくもって順調だ。心配いらねえ」

「……本当に？」

「ああ。次のテストではお前に勝っちまうかもな」

ムリダナ。そんなに簡単に勝てるならお前はFクラスにはいないよ。

「……そう、そこまで言うのなら……勝負する？」

「……勝負だと？」

「……うん。雄二がどの程度できるようになったのか、見てあげる」

「ほほう……ずいぶん上からの目線で言ってくれるじゃねえか」

實際上だからな。

「……実際に、私の方が上だから」

「くつ。上等だあ！勝負でも何でもしてやろうじゃねえか！本当の

実力の違いってやつを見せてやらあ！」

「……わかった。それなら、この後に出題範囲の簡単な復習テスト

で勝負。それで、私が勝ったら、雄二は今夜私と寝る」

「は？」

本当に一途だな。

「……代わりに、雄二が勝ったら吉井とトグサと一緒に寝るのを許してあげる」

「驚くほど俺のメリットがねえぞ!？」

メリットがないとは心外だな。

「まあ、代表の権限で命令するならハジメテを上げてても良いだろう。」

さあ、神原駿河、戦場ヶ原ひた儀、八九寺真宵、千石撫子、阿良々木火憐、どの子のハジメテがいい？」

「ノーリスク、ハイリターンじゃないか雄二！」

「……明久録画を頼む」

「任せてムツツリー二！」

「まったく、お主らは……」

「だめです！そんなのいけません！」

「そ、そうよ！ダメ！絶対ダメ！」

なんか、危なくなる気がするな……。

「翔子、風呂に入りたいんだが案内してくれるか？」

「……わかった」

「ふう……」

誰も来ないな。一人だと広すぎて落ち着かない。
ガラッ

「なんだ、秀吉だけか。ほかの奴らは？」

「ワシの性別を正しく判断してくれる人がだんだん減っているのじやがどうすればいいのかわかる？」

うん。どうしようもないと思う。それに秀吉にも原因はあると思う。タオルで当たり前のように胸を隠してるし動作の一つ一つがなんか色っぽい。

「体でも鍛えたらどうだ？秀吉は全体的に細いし」

「そう思っ筋トレもしておるんじやが、筋肉が付にくいみたいでう」

「なら、明久たちを見習って、少し本能に忠実になってみれば？」

「姉上にやられそうじゃのう」

まあ、仕方ないか。

「まあ、でも、安心しろ。秀吉のことは僕がちゃんとわかってるから」

ポッ

……いやいやいや！なぜ顔を赤くして俯く！？そんな反応するから勘違いされるんだぞ！？」

「ト、トグサ。お願いがあるのじゃが……」

「な、なんだ？」

「また、は、齒磨きをしてくれんかのう？」

齒磨きセットを見せながら僕に言う秀吉。

「しょうがないですねえ。姉下さん。末っ子はやっぱり甘えん坊なんですかねえ。ホットな女こと八九寺真宵が齒磨きをしてあげましょう」

「はっ、八九寺！？なぜ？というよりワシの名前は木下じゃ！」

「失礼。噛みました」

「違う、わざとじゃ」

「噛みまみた」

「わざとじゃない！？」

「垣間見た」

「何をじゃ！？」

「もちろん、甘えん坊な木下さんですよ」

「くっ、そ、それより水着が何か来てくれんかのう？さすがにその

タオルだけというのは…」

「あ、これは失礼しました。ロリコンの木下さんはやはりスク水が
いいんですね？」

「ワシは断じてロリコンじゃないぞ！」

「わかってますよ。木下さん。でも、水着を着ていいんですか？私
これでも発育はいい方なんですよ？今なら誰もいませんし、私と合
体しませんか？」

「な、何を言っておるのじゃ！？そういうものは好いておる者同士
ですものじゃ！」

「私は好きですよ？木下さんはどうなんですか？」

「きつ嫌いではないが…」

「なら、何も問題ないじゃないですか。いきますよ！」

デジクロス！！」

そう叫び秀吉に後ろから乗る。簡単にいえば肩車の形になっている。
「はっ？」

「やっぱりデジモンはいいですねえ。私的にはジョグレス進化が
よかったです。がビジュアル的にどうにもなりませんからね。おや
？木下さん、なぜ顔を赤くしてるんですか？もしかして勘違いして
しまいましたか？」

「お主は…」

「でも安心しました」

「？」

「やっぱり木下さんも男の子なんですねえ」

「何度もそう言っておるだろうが」

「しかしですねえ。小学生とはいえ肌をさらしている女の子が横にいるにもかかわらず暴走しないなんて、興味がないと思われてもおかしくないですよ?」

「そういうもんかのう...」

「そういうもんです。男として見られたいなら、さっさと彼女でも作って乳繰り合ってればいいんです」

「しかしのう。相手がおらぬし、何よりあ奴らとバカやるのが今は楽しいのじゃ」

「木下さんのそういうところも好きですよ。さて、そろそろ始めましょうか」

「何をじゃ?」

「もちろん、歯磨きですよ!私のチクタックにかかればものの数秒で昇天することでしょう!」

「(チクタック?)」

数分後

「ひ.....ひうぐ、ぐ、ぐうっ!?ひ、ひう.....はう、はう、はう。

う.....ぐ、はあ、はあ。あふっ.....ふ、うっ。う.....うんっ!.....

.....さすが木下さんです。素晴らしい指使いです」

「何か誤解されそうな台詞じゃな...」

「しょうがないでしょう。歯ブラシが一本しかなかったんですから」

僕と秀吉とお風呂（後書き）

もうすぐ肝試し編が始まりますがトグサの召喚獣をどうするか迷っています。いくつか案があります。

案？一度死んでよみがえったことから吸血鬼。姿は暦もしくはハートアンダーブレード、忍。腕輪の能力は妖刀・心渡りを取り出す感じ。

案？どんな人物にもなれることからドツペルゲンガー。姿は相手の召喚獣。能力は未定。

案？化物語、刀語のキャラ。

の三つを今のところ考えています。

これより素晴らしい案があると思いますのでアンケートを取りたいと思います。

その一。トグサの召喚獣をどうするか？

1、作者の案でいい。（？、？を選んだ場合どのキャラか、？、？を選んだ場合どんな能力かを決めてくださると助かります）

2、自分の案がいい。（案があつた場合再度アンケートを行います）その二。優子の召喚獣をどうするか？

1、秀吉と同じ猫又。

2、その他

以上です。

感想待ってます。

僕とお泊りとゲーム（前書き）

アンケート回答人数が一人だけ…orz
作者のテンションが急降下してます。テンションを上げるために感想をください。僕は泣き顔でそう言った。

僕とお泊りとゲーム

風呂に入っている間に何かあったらしくテストはやらす勉強会を続け、今は就寝時刻。

女子部屋での会話

「あれ？私の髪止め、何処に行ったんでしょう？ここに置いておいたはずなのに」

「なくしちゃったの？」

「……探すの、手伝う」

「あ、いえ。明日の朝、お布団を片づける時にでも探すから大丈夫です」

「……わかった」

「そう言えば、瑞希っていつもあの髪止めをしてるわよね」

「……思い出の品、だとか？」

「んっふっふ」。ボクの予想だと、好きな人からの贈り物って感じなんだけど？」

「いえ。あれ自体は自分で買ってきた普通の髪止めです」

「予想が外れたわね、愛子」

「確かに、思い入れはありますけどね」

「え？なにに？面白そう」

「残念ながら、それはヒミツ、です。それより、私は工藤さんのお話が気になります」

「え？ボク？」

「そうね、ウチも気になるわ」

「ふふっ。二人とも、そんなに僕のエッチな話が聞きたいのかな？」

「違うわ。そっちじゃなくて」

「土屋君との関係、の方です」

「ふえっ!？」

「……それは私も気になる」
「アタシも」

「な、何を言ってるのさ四人ともっ。僕とムツツリー二君がどうこうだなんて、そんなことあるわけないじゃないっ」

「そうやって否定するところが怪しいですね」

「……いつもの愛子なら笑って受け流す」

「ち、違うってば!僕もムツツリー二君もそんな気は全然ないよっ。ゆ、優子はどうなのさっ」

「アタシ?アタシは順調よ。まあ、問題があるとすればFクラスの男子達ね。そのせいで女の姿じゃないとはゆっくり話せないから」

「あははは……」

「さあ、次は愛子の番よ」

「……話せば楽になる」

「話しちゃいましょうよ。ね?」

「だから、あんな頭でっかち、僕はまったく興味がないって言うてるのに!」

男子部屋の会話

「鑢十種から始まるっ」

「……イエーッ!」「……」

「古今東西っ」

「……イエーッ!」「……」

「どこかのひねくれ者が言ってるような名言っぽい言葉!」

「何そのお題!？」

パンパン（トグサ）

「大人の男は、謝らない。魂の価値が下がるから」

「確かにそれっぽいけど!」

パンパン（雄二）

「好感度なんていらねえよ。僕は最低の人間でいい」

「こんなの雄二じゃないっ」

パンパン（秀吉）

「理由を他人に求める奴が、正義であってたまるものか。他人に理由を押し付けて、それでどうやって責任を取るといふんだ。お前達は正義でもなければ正義の味方でもない。正義の味方ごっこで戯れる　ただのガキだ」

「なんでみんな当たり前のように進められるの!？」

パンパン（ムツツリー二）

「…実の兄の手を胸で揉んでくるとは、お前はとんだ変態妹だな」

「何その台詞!？明らかにおかしいよ!？」

パンパン（明久）

「え、えーと。変態の汚名を受ける勇氣!」

「……ちっ」「」

「これでいいの!？っていうかなんで舌打ち!？」

パンパン（トグサ）

「いいや、僕は必ず帰ってくるぜ……お前のその胸の中にな!」

「最後の言葉で台無しだ!」

パンパン（雄二）

「真面目な話はいいんだよ。下着の話を続けよう」

「なんか方向がおかしくなってるよ!？」

パンパン（秀吉）

「今回は僕の格好いいところを見せてやる。惚れないように気をつけるんだな。近親相姦になっちまうぞ」

「秀吉!？」

パンパン（ムツツリー二）

「…これ以上足を舐められなくなかったらその金を寄越せ」

「変態だ!もうただの変態だ!」

パンパン（明久）

「正直、エッチな話以外はしたくない」

「……罰ゲーム決定。この変態」……」

「どうして!？」

甘い明久。その言葉はお前が言うべき台詞じゃない。

「さあ明久。くじを引くのじゃ」

「納得いかない……」

「安心しろ。お前以外の全員が納得してる」

明久がくじを引き内容を読み上げる。

「『女子部屋に行つて姫路さんの髪止めを戻してくる』って、これは僕の書いた罰じゃないか」

「なんだ明久随分とぬるい罰ゲームだな」

「そう? ほかのみんなはどんな罰ゲームにしたの」

「俺は『翔子の部屋から婚姻届を奪取してくる』だな。当然、取ってくるまで何度でもトライしてもらう」

「ワシは『本気女装写真集の撮影』じゃなワシの苦しみを皆も味わうべきじゃ」

「……『各グッズ用写真の撮影』。ポーズを決めてる写真はなかなか撮れない」

「僕は『指定された人物にさっきのお題で自分が言った台詞を囁いてくる』だな。明久は姫路と美波。雄二は翔子。ムッツリー二は愛子。秀吉と僕は優子を予定してたんだが」

明久の場合

「正直、エッチな話以外はしたくない」

「明久君ちよつと向こうで話しましょうか?」

「アキ。ちよつと向こう行きましょう」

「二人とも笑顔が怖いよ!？ちよつとま……」

bad end

雄二の場合

「真面目な話はいいんだよ。下着の話が続けよう」

「……雄二つたら大胆」

「照れながらアイアンクローをするなああああああ！！」

badend

秀吉の場合

「今回は僕の格好いいところを見せてやる。惚れないように気をつけるんだな。近親相姦になっちまうぞ」

「あんたは何言ってるのかしら？」

「ちがつ、姉上！その関節はそっちにまがらなっ」

badend

ムツツリー二の場合

「…これ以上足を舐められなくなったらその金を寄越せ」

「なかなか過激な発言だねムツツリー二君は、いいよ相手してあげる」

ぶしゃあああああ！！！！

badend

トグサの場合

「いいや、僕は必ず帰ってくるぜ……お前のその胸の中にな！」

「バカ…何言ってるのよ」

goodend

僕以外に助かる奴がいないな。

（（（当たらなくてよかった…）））

「さて。あいつらが寝るまで適当にダベっとくか」

「そうじゃな。小一時間でもしたら眠っておるじゃろっ」

「……お題は？」

「そうだな。『今までの人生で一番恥ずかしかったこと』にするか。

そこにウノがあることだし負けたやつが話すって感じでどうだ？」

「『『『オツケー』』』」

「スキップ」

「……」

「なら俺は赤の4」

「…赤の7」

「ワシは赤の8と黄色の8の二枚出しじゃ」

「スキップ」

「トグサ！どんだけスキップがあるのさ！？一度も僕の番が回ってこないよ！？」

「いいことを教えてやろう明久。一枚以外すべてスキップだ。そしてほかの三人が上がるまでお前の番が回ってくることはない」

「あれっ！？もう詰んでる！？」

明久が罰ゲーム、雄二が婚姻届を奪取するために女子部屋に行つて数分後。

明久と雄二らしき物体が部屋に戻ってきた。

なんやかんやでテストが終わりある日の文月学園。

「…学園長。これはなんですか？」

「……夏、だねえ……」

僕とお泊りとゲーム（後書き）

感想を待ってます。

アンケートの締め切りは次の次の話が書き上がるまでです。
感想の量が多いほど書くスピードが上がります。

ifストーリー〜もしバカテスではなくネギまの世界に行ったら〜（前書き）

アンケートに应运えていただきありがとうございます。涙で画面が見えません。

今回の話はこの小説を書くときに考えていたifストーリーです。

ifストーリー〜もしバカテスではなくネギまの世界に行ったら〜

「ん、ここは？」

周囲の確認。右、森。左、森。後ろ、森。前、森+紙。紙を拾って見る。それは手紙だった。

「さっきぶり。本の神（仮）だよ。」

実はバカテスの世界に送るはずだったんだけど間違えて違う世界に送っちゃった（笑）

ネギまつて知ってる？焼き鳥じゃないよ？まあ簡単にいえば魔法とかがある世界。表向きは普通の世界と変わらないけどね。

ちよつと危ない世界だから君の力を強化をしておいたよ。

まず一つは忍法・骨肉細工で姿を変える時化物語と刀語のキャラになる場合は完全になりきれ。姿だけじゃなく能力もね。あと完成形変体刀も念じれば出るようにしてあるから。あつ、壊れてもしばらくすれば直るから安心しなよ。

もう一つはおまけかな。姿を変える時に服もイメージすればその服になる。いちいち着替えるのもめんどくさいしね。

じゃ後は頑張つてねえ〜。」

魔法ねえ。とりあえず…。

「なんや一般人かいな。悪いなあ、見られたからには殺さないかんのや」

鬼がいることはわかった。

side 刹那

「くっ！数が多いっ…」

まさか時間差で召喚してくるとは…油断していた…。脇腹の怪我がかなり深いこのままじゃ…。

「悪いな神鳴流の嬢ちゃん。悪いが手加減できんのか。恨まんといてな」

「くそっ。ここまでか」

ドンッ！

なんだ！？

横の森から出てきたのは上半身がなくなり消えていく鬼の下半身と赤いドレスを身に纏った美女。しかしなぜだろうとても美しいのに頭に響いてくる。

アレは危険だ！

「我が名は、キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレード！鉄血にして熱血にして冷血の吸血鬼じゃ。すまんがうぬら…儂のリハビリに少しばかり付き合ってもらっぞ！」

そこから起こったのは戦いじゃない。ただの虐殺だ。技も何もない彼女の動きそのものが暴力。彼女が走れば地面が抉れ、彼女が手を振れば暴風が起き、彼女が叫べば誰も動けない。

「は！「ははは！「あはは！「ははは！「あははは…は？なんじゃもう終わりか？」

数十体はいた鬼の集団がものの数十秒で全て消えた。

「やっ…」

彼女がこっちに来る。優雅な足取りで距離を縮めてくる。その足が撃ち抜かれた。

side out

狙撃か……。痛くないわけじゃないけど体が慣れているのかな声を上げるほどでもない。

「小娘！死にたくなかったら出て来い！僕は頭を撃ち抜いても死なぬぞ！」

しばらくすると肌の黒い背の高い女子が出てきた。まあ、銃を構えたままだが……

「それじゃあ、ちっこいほうの小娘。傷を見せろ」

なんで剣を構えるかな。銃持つてる子もさっきより睨んでくるし。まあ吸血鬼だしね。

「最後のチャンスじゃ。傷を見せろ」

そう言う和小さいほうの女子が傷を見せてきた。かなり深いが大丈夫だろう。手刀を作り自分の脇腹を突き刺す。

「なっ！？」

驚いているがそんなのは気にせず、女子の傷に血をたらす。すると見る見るうちに傷がふさがっていく。傷があつた場所軽く撫で聞く。

「他にはないか？」

「はっはい！大丈夫です！」

「いったい何をしたんだ？」

背の高い女子がはまだ銃を構えながら聞いてきた。

「吸血鬼の血には治癒能力があることを知らんのか？……ああ、安心するがよい、この程度では吸血鬼にはならんよ」

「一応、侵入者としてここの代表にあつてもらいたいんだが」

「ふむいいじやろう。案内せい」

「くくく、鬼の次はぬらりひょんか。いいじゃろう相手になつてやるう」

「いやワシ人間じゃから」

「たわけ、儂は五百年生きておるが、そんな頭をした人間、寡聞にして知らんぞ」

だつてねえ、なにあの後頭部？どんな人生送つたらそんな形になるの？つうかソファーに座つてる幼女笑いすぎだし、ダンディなメガネのおっさんも口塞ぎながら笑つてるし後ろの女の子も顔そらしてるし。

「ま、まあ、ワシの頭の話は置いておくとして、此度はうちの生徒を助けてくれたことに感謝するぞ」

「かまわん。儂は儂に降りかかった火の粉を振り払つたにすぎん。その小娘らが勝手に助かつただけじゃ」

「ふむ、ならお主がここに來た目的は？」

「觀光じゃ」

「……はつ？」「……」

皆啞然としてるな。まあ、間違つてはないだろう。

「本当はこことは違う場所に送つてもらはずじゃったんだが手違いでここに来てしまつてのう。戻る手段もないから、しばらくこの世界を見て回ろうと思つただけじゃ」

「いくあてはあるのかの？」

「ないの」

「ならうちで働かんかの？」

「学園長っ！」

おお、ダンディなおっさんが学園長に詰めよつてる。まあ、いきなり吸血鬼を雇うとか言えばそうなるよな。

「ふむ、いい提案じゃが……何をたくらんでおる」

「別に何もたくらんどらんよ。強いて言うなら監視のためにかの」
「そりゃそうだろうな。とりあえず元の姿に戻るか…」

「なるほど。いいじゃろう。正直に話した代わりに儂の本当の姿を

見せてやろう。骨肉細工」

side 刹那

「なるほど。いいじやろう。正直に話した代わりに僕の本当の姿を見せてやろう。骨肉細工」

彼女がそう言うともものすごい速さで彼女の体に変化していく。長く美しかった金色の髪が短く黒く。かなりスタイルのよかった体が凹凸もなくなり、男の体に。絢爛豪華なドレスが黒く普通のどこにでもいそうな格好に。妖艶だった彼女の顔が温和な顔に変わった。

「名乗るのが遅れましたね。僕の名前は鑢やすりとくさ十種です」

「……」

「みんな黙ってどうしたんですか？」

「あ、あの今のは？」

私が声をかけると優しそうな笑顔をこっちに向けて答えてくれた。

「今のが僕の力です。外見から体の中身まで帰ることができる変装……というより変身の方が正しいですかね」

私が驚いているとエヴァンジェリンさんが質問をした。

「待て！それは能力まで模倣できるのか！？」

そうだ。彼は吸血鬼の血と言って私の傷をいやした。なら彼は吸血鬼なのか？それとも能力まで模倣できるのか？

「ふつうは能力までは模倣できませんが、特定の人物は能力も含め完全になることができます」

「ならさっきの女も存在するののか？」

「さあ、おそらくいないでしょう。ただの夢物語ですから」

「それはどうということだ？」

「黙秘させていただきます。言葉で説明するのは難しいですし、簡単に手の内を明かすわけにはいきませんから」

「そこまでじゃエヴァンジェリンそろそろ話を戻させてもらっぞぞ
どうやら学園長たちも放心から抜け出したみたいだ。」

side out

よかったあゝ。流石に神様からもらいましたって言っても頭を疑われるだけだしな。

「で、うちで働く件なんじゃが…」

「僕がかまいませんよ。もちろん他の人達が納得してくれるならですが」

学園長の隣にいるダンディなおっさんの方を見ながら言う。

「フッフッフ。大丈夫じゃよ。しばらくの間監視させてもらうからの」

うわっ。普通に監視って言ったよ。このぬらりひょん。まあ、別にいいけど。

「まあ、構いませんが…」

「で、仕事の話なんじゃがの、君には副担任と女子寮の管理人と警備員と「待ってください」何か問題でもあるかの？」

真顔で聞いてきたよ。

「教員免許どころか戸籍すらない僕を教員にするところがまずおかしいです。素性の知らない男を女子寮の管理人にすることもおかしいです。そして何より監視が必要な人間にそこまで仕事をやらせるのがそもそもおかしいです」

「教員免許と戸籍はワシの権力で何とかなるじやろっし、君が女子生徒をどうにかしようとするものならそんな言葉を返してこないじやろっし、そして何よりこの方が監視がやりやすいからの」

隣のダンディなおっさんに「このぬらりひょん大丈夫なのか？」とアイコンタクトを試みる。

苦笑で返された。

「はあ、もういいです。ただ女子寮の管理人は生徒たちが辞めるよと言ってきたらすぐに辞めさせてもらいます」

「いいじやろっし手続きの方は明日には終わるじやろっしから今日のところはタカミチ君のところに泊まってくれるかの」

ぬらりひょんがそう言つとダンディなおっさんが手を出してきた。

「タカミチ・Ｔ・高畑。よろしく」

「よろしく」

「じゃあ、置いてあるものは自由に使つていいから」

「そんなに簡単に信用していいのか？」

「少なくとも学園長よりはまともだつてわかつたからね」

「あの頭と比べたらほとんどの人物がまともです」

ifストーリー〜もしバカテスではなくネギまの世界に行ったら〜（後書き）

アンケート中間発表。

キスシヨット・アセロラオリオン・ハートアンドブレード三票

忍野忍一票

阿良々木暦一票

ドッペルゲンガー一票

？の案が二つ

書物を読みあさってるから魔女または魔術師。武器は魔導書、腕輪の能力は魔法。もしくは大きな釜と掻き混ぜる棒（おにぎりさんの案）

黒桐幹也で、同じ型月キャラでキャラデザインが同じ遠野志貴の直死の魔眼が能力（エミリア&志保さんの案）

アンケートに答えて下さりありがとうございました。このまま行けばハートアンドブレードに決まりそうです。優子の召喚獣は特に何もなかったので猫又で行きたいと思います。（というより余り活躍する場所もないような…）

この話についての感想が多いようなら続きの方も考えたいと思います。

僕と補習と吸血鬼（前書き）

アンケートに答えていただきありがとうございました。

トグサの召喚獣は鉄血にして熱血にして冷血の彼女になりました。
楽しんでいただければ幸いです。

僕と補習と吸血鬼

期末試験が終わり夏休み。Fクラスみんなは補習を受けていたが、「あれは、十年前以上の夏……俺がブラジルの留学生とレスリングをやっていた時のことだ」

『『ぎゃああアアああー………っ!!』『』』

Fクラスが灼熱地獄と化した。

「まったく、脱走なんて考えるからこんなことになるんだ」

ぐったりしている雄二たちを下敷きであおいでやりながら言う。

「なんでお前は平気なんだよ。俺達と同じで日当たり最高で風通し最低のワーストポジションだろ？」

「よく言うだろ。心頭滅却すれば火もまた涼しくて。問題集熟読してた」

「問題集は読むものじゃなくて解くものだと思いますが……」

「それはそうと召喚獣を召喚してみないか？どんな装備になったか気になるし」

僕がそう言うのと皆賛成してくれた。明久が鉄人に召喚許可をもらえないか聞いたところ『厄介なことになった』と言いたそうな表情をし断った。皆が理由を聞くがごまかしている。そこで雄二が、

「どうやら何かあったのは間違いなさそうだな。高なりや召喚許可をよこせなんていわねえ。ただし、何が起きたのか説明してもらわず。起動」

「それじゃ、さっそく。試験召喚！」

雄二がフィールドを出し明久が召喚した。だがいつもの召喚獣と違い明久と同じぐらいの大きさに甲冑に身を包み剣を持つてゐる。だが雄二が頭をはたいたら首が転がった。鉄人に聞くと調整を失敗したらしくオカルト的な要素が大きく出たらしい。化物の類か何かになり召喚者の特徴や本質から妖怪が決定しているらしい。ちなみにみ

んなの召喚獣は、

明久…デュラハン。特徴、頭がない!!バカ。

雄二…狼男。特徴、野性味あふれる。

秀吉…猫又。特徴、可愛い。

ムツツリーニ…ドラキュラ。特徴、血を欲している。若い女好き。

姫路…サキュバス。特徴、巨乳。大胆。

美波…ぬりかべ。特徴、おっと、それは言わない約束だ。

その他…ゾンビ。特徴、性根が腐ってる。

「トゲサはどうなんだ？」

「じゃあ、召喚してみるか。試験召喚」

僕の召喚獣は火ダルマだった。

「あつっうううううううううう!？」

「なんじゃあ!？」

僕が熱さに苦しんでいると召喚獣が勝手に動き回りが当たらないところに出た。そして僕は驚愕した。金髪に紅いドレス。その美しさを僕は知っている。

「吸血鬼を日の下に出すとはどういうことじゃ?我が主よ」

キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードがそこにいた。

「なんじゃ?お主が僕を呼び出したんじゃろ?……ああ、そうか。

まだ名乗ってなかったか。僕は「鉄血にして熱血にして冷血の吸血鬼。キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレード」なんじゃ知っておったのか」

ああ、知ってる。しかしなぜ彼女が自己を持っている?普通の試験召喚ならあり得ない。

「西村先生。ちょっと学園長に聞きたいことがあるので言ってきました」

「ああ」

おそらく何も分からないだろうが一応報告しておこう。

廊下

「ハートアンダーブレード。三つ聞きたいことがある」

『なんじゃ？』

廊下でさつきから気になったことを聞く。

「阿良々木暦を知ってるか？」

『なぜお前様がその名を知っているのかは知らんが、そやつは我が従僕じゃ』

「八九寺真宵は知ってるか？」

『知らん』

おそらく彼女は僕が考えているルート、もしくはそれに近いルートから来た存在だろう。

「最後の質問だ。世界を滅ぼしたか？」

『お前さま。どこまで知っておる？』

「僕が知ってるのは二つのルートだ。成功したルートと失敗したルート」

『なら僕は失敗した方のルートじゃな。僕は我が従僕を失って世界を滅ぼした。……じゃが成功したルートの僕に血を与えたから我が眷属たちも元に戻っておるじやろう。今の僕の存在はあれじゃ死ぬ間際に見ている夢のような存在じゃ』

「よかった。彼らに会えたのか」

『別ルートとは言え我が従僕に撫でられて幸せじゃったよ。それはそうとお前さま。いい加減名前を知りたいのじゃが……』

「ああ、そういえばそうだったな。僕は鑢十種。転生者だ」

『そうか転生者か。お前様頭は大丈夫か？』

「いや、大丈夫だから！厨二設定とかそんなのじゃないから！」

『そうはいつてもものう。まだ『もしもボックス』でこの世界を作ったとかの方が説得力あるわ』

「やっぱり藤子ファン！？でも今はそんなことどうでもいい。このままだと僕がただの痛いやつになってしまふ！どうすれば防げる！

？」

『そんなの簡単じゃ。よくあるじゃろ？ 転生の際に新しい能力をもらう二次創作が。そんな感じにお前さまももらっておるのじゃろ』

「まあ、もらってるけど。それじゃあ、奥義！ 神速変化・阿良々木暦！」

『まさか本物だったとはそれにしてもほんとそっくりじゃのう…』

「なぜ下半身を見ながらその言葉を言う！？」

『しかしのう隣でいきなり裸になったら自然そこに目が行くじゃろう？』

「そこは眼を手で隠しながらも指の間からちらちら見るところだろう！」

『そんなわけなかるう。そんなのはお前様のような男が生み出した幻想じゃ。まずはそのふざけた幻想をぶち殺すっ！』

「お前は『怪異殺し』だけじゃなく『幻想殺し』も持ってたのか！？ というよりお前の存在自体が幻想だろう！」

『生きているのなら幻想だつて殺して見せる』

「お前魔眼持ちだったのか！？」

『何を言っておるんじゃお前様。吸血鬼が魔眼を持っているのは当たり前じゃろ？ 真祖のお姫様も持っておるんじゃぞ？』

「もうネタに走るのはやめてくれ。ミスドでドーナッツ買ってやるから」

『なかなか楽しかったぞ？ 従僕と話しておるようじゃった…』

「それはよかった」

『あ、ゴールデンチョコレートは必ず買うんじゃぞ』

元の姿に戻りながらハートアンダーブレードに対して言う。

「全種類を五個ずつ買ってやるよ」

『ぱないの』

「ぱないだろ」

「と、言うわけでオカルト要素がかなり強いらしく召喚獣が自立してます」

「報告ご苦労。まあ、一時的なもんだからそんなに気にすることでもないさね」

「だろうね」

教室

「ハートアンダブレードさんは吸血鬼なんですか？」

『そうじゃ』

「ということはトグサの本質は何かのう？」

「そうね。土屋とは違っただろうし」

『どうということじゃ？』

「呼び出される召喚獣は召喚者の特徴や本質によってきまるらしいんじゃない」

「そうか。僕は昔キャラが定まっていなかったことがあるんじゃないか？姿を変えてキャラを変えまくってるらしいの」

「ははっ。そうかもな」

おそらく彼女が呼びだされたのは僕が一度死んでよみがえった存在だからだろう。ハートアンダブレードのように。キャラが定まっていなくても否定できないが。まあ、調整が終わるまでの少しの間だけ彼女には楽しんでもらうとするか、夢なら楽しいほうがいいからな。

「…写真のモデルになって欲しい」

『ミストのドーナッツ十個じゃ』

「…契約成立」

どうでも言いがドーナッツばかりで飽きないか？

僕と補習と吸血鬼（後書き）

感想待ってます。

僕とミスドとハートアンダーブレード（前書き）

ネタが思いつかない。 o r z

僕とミスドとハートアンダーブレード

肝試しの準備がゾンビのサッカー大会に変わり妖怪大戦争になったところに、

「「お前らうるせえんだよ!!」「」」

三年の人達が怒鳴り込んできた。

「騒がしいと思ったらやつぱりまたお前か!吉井!」

「お前はつくづく目障りな奴だな!!」

坊主頭の先輩とソフトも悲観の先輩が気久になんか言ってる。仕方がない手伝ってやるか。

「変た!変態先輩でしたっけ?」

「だめじゃない吉井君。ごみくz!先輩のことをそんなふうに言うては」

「おい。お前俺達のごみくずって言わなかったか?」

「そんなこと言うわけないでしょう。…ごみくずに失礼じゃない」

「俺達に失礼だろ!?!」

「常村と夏川だ!名前くらい覚えろ!」

「それで常夏先輩。どうしたんですか?」

「っていうかお前らうるせえんだよ!俺達のアてつけかコラ!」

「夏期講習に集中できねえだろうが!」

二人の後ろの三年生たちも「そうだそうだ」と騒ぎ立てている。

「すいません。上の階まで響いているとは」謝る必要はないわ、吉

井君「戦場ヶ原さん?」

「何言ってるんだよお前」

「廊下で勉強しているくずたちに構う必要はないと言ってるのよ」

「なんだと!」

「あら、違ったのかしら?新校舎なら教室に入って戸を閉めてあつたなら下の階の騒ぎなんて聞こえないはずだけど?」

「くっ」

「ああもう、めんどくさい。坂本君後はお願ひするわ」
後のことは任せて優子の所へ行く。

「優子、調子はどうだ？」

「順調よ。あ、そうだ。ドーナッツあるんだけど食べ…」
優子が出した箱が消えた。

「…ハートアンダーブレード」

「なんじゃいお前様？」

影からハートアンダーブレードが何食わぬ顔で出てくる。

「返さないならしばらくの間ミスドにはいかないからな」

「な！？お前様正気か！？儂からミスドを取ったら何も残らんぞ！？」

「それはどうなんだよ吸血鬼」

「大丈夫よ。二人とも多めに作って来たからみんなで食べよ？」

そう言うのと優子もう一つ箱を出す。

「ほら、お前もさっきとった奴出せ。影の中で一人で食ってもつまらんだろう」

「それもそうじゃのう」

そう言い、影から箱を出す。

「そう言えば宿題の方はちゃんとやってる？」

「宿題？ああ、そんなものもあつたな…」

「そんなものもあつたなつてしつかりやらないとだめよ？」

「？何を勘違いしてるんだ優子。夏休み入る前に終わらせたぞ？」

「夏休み入る前って…それはそれでどうなのよ…」

せつかくの夏休みを宿題なんかで潰してたまるか。…まあ、補習で潰れてるんだけど。

「別にいいだろ。悪いことしてるわけじゃないんだし」

「そうじゃのう。まだ終わってないワシよりはいいじゃろう」

「秀吉か。で、どうなった？」

一つもらうぞいとドーナッツを取りながら秀吉が答えた。

「あの後学園長が来てのう。三年生と驚かす側と驚かされる側にわかれて対決することになったのじゃ。ワシらは驚かされる側じゃ」

「どんな怪異があるか楽しみじゃのう」

「吸血鬼、おもし蟹、迷い牛、レイニー・デヴィル、蛇切縄、障り猫、困い火蜂、しでの鳥、ここら辺に出てきてもらいたいな」

「まあ、何が来ようと儂らは負けんがな」

そりゃそうだ。怪異殺しが怪異なんかには負けるはずがないからな。

「もうそろそろ終わるし、帰りにミスドでもよるか」

「体はミスドで出来ている。」

血潮はポン・デ・リングで 心はゴールデンチョコレート。

幾たびの店舗を越えて不敗。

ただの一度も遠慮はなく、

ただの一度も喰い残しはしない。

彼の者は常に独り 影の中でポイントに酔う。

故に、飲茶に意味はなく。

その体は、きつとドーナッツで出来ていた。

行くぞ、我が主様。お小遣いの貯蔵は十分か？」

「……………」

「ドーナッツを奢るのはいいが…別に、お前を満足させてしまって

も構わんのだろう?。」

「遠慮はいらん。我が腹を満足させてみよ、お前様」

「そうか。ならば、期待に応えましょう」

ミストにて

「足りんわ。儂を満足させたくばこの三倍は持って来い!!」

僕とミスドとハートアンダーブレード（後書き）

感想待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5043m/>

バカとテストとミミック

2011年3月10日21時52分発行